

2018 **08** Volume.101  
DIGITAL EDITION

**18**  
未満

【えっちマンガ】

高遠るい  
ばふえ  
とけうさぎ  
孫陽州  
ジンナイ  
嘉納あいら

新連載  
スタート!

【**聖天使ユミエル**】

白うへ風い  
原作：黒井弘騎

【連載&読み切り小説】

有機企画×緑木邑  
酒井仁×桐島サトシ  
火村龍×ササマシ  
千夜詠×恋河ミノル  
下山田ナンプラーの助×8000  
下山田ナンプラーの助×中乃空  
桃生雨京×ひかっち

【**超昂神騎エグシール**】

峰崎龍之介×孫陽州  
原作：ALICESOFT

**特別付録!**



えっちな つくってもてあそぼう エジガンドライーヴラボ

**ペーパークラフト**

今号の  
Special Fiction Series  
の特集

**バトル  
フル  
アタック**

イカされる前に  
対戦相手を絶頂に導け!

表紙&ピンナップ  
テレホンカード  
応募者全員  
サービス

中乃空 FCT

氷室しゅんすけ

カラー  
ピンナップ  
COLOR PRINT

**試し読み版**



どちらが正義か犯しあって決めろッ!  
清楚ヒロインのむっちりボディに迫るのは  
ダークヒロインのふたなりペニス!

隣光槍姫

# ハーバルレーチエ

—イかせあう変身ヒロイン—

しもやまだ すけ  
小説 **下山田 ナンプラーの助**

なかのそら  
挿絵 **中乃空**

酸鼻極まる地獄絵図がそこにあった。

突如襲来した異形の怪人たちが無差別に街を破壊し人々を襲い、彼らの平穏な暮らしは無惨にも蹂躪されてしまう。

しかし、悪のはびこる所には正義あるもの。今まさに暴悪の巨大怪物が、その足で数人の人々をまとめて踏み潰そうとしたその瞬間。

「サントウアアリオ！」

荒廃した街に、少女の声が響く。

刹那、蟻のように踏み潰される運命だった者たちを覆うように、ドーム状の輝くバリアが生まれて彼らは命を繋ぎとめ、遅れて制服姿の若い少女が一人駆けてくる。

「みなさん、逃げてください！ ここは私が食い止めます！ 変身っ！」

十体あまりの異形たちの前に颯爽と現れた学生服の少女が真上に掌をかざすと、天から光が降り注ぎ、纏っていた学生服が瞬時に消滅して全裸となり、次の瞬間には白とピンクを基調としたレオタード状のコスチュームが若く瑞々しい身体にびつたりと張りつく。

セミロングヘアは一気に伸び、さらには黒から燃えるような緋色へと根元から変色していく。

何もないところから出てきた白い槍を握りパトントワラーよろしくクルクルと回転させ、変身した少女は口上とともにポーズをとって高らかに名乗る。

「憐光槍姫リーベルチェ、無辜の人たちにご一臂します！」

まさに早天慈雨、生命の危機に瀕していた人々から歓声が上がると。

「おおつ、変身ヒロインが来てくれた！」

「よ、よかった……私たち助かるのね！」

生への希望を見出した民衆を無事に避難させ、

ベルーチェは数多の異形と対峙して。

「願いわ天へ、平和よ大地へ！ 降り注げ慈悲の剣、ピエタスパーダ！」

祈りを捧げるように槍を天へ突き上げると、穂先から白い光が進り、一拍遅れてそれらが雨のごとく無数に降り注ぐ。

光に貫かれた十体あまりの異形の怪物たちはおぞましい悲鳴を上げ、文字通り大地に釘付けにされた。

「……ふうっ」

突如、時空の狭間から這い出てきた異形の生命体彼らにより人類は、種の存続を大いに脅かされてきた。

しかし程なくして、彼らに抗する特殊な力を持った若い少女たちが散見される。

変身せずともある程度は戦えるが、華麗なコスチューム姿に変身するとともにその力をいかに発揮する少女たちを、人々はいつしか変身ヒロインと呼び、彼女らを支援・統括する「機関」も発足した。

今、数多の怪物を光の剣で行動不能に陥らせた白とピンクを基調としたコスチュームを纏い槍を持つ緋色髪の少女リーベルチェも、変身ヒロインの一員だ。

牙があつたり羽があつたりと個体差はあれど、いずれも人間より大きく攻撃的な外見で人々に恐怖を煽る異形に近寄り、彼女は優しく声をかける。

「お願いします。どうかこの世界から、手を引いていただけませんか」

リーベルチェは、敵であつても極力相手を殺さず、可能であれば対話と説得を試みる心優しい少女だった。

人類を守ることが大前提だが、それでも敵は傷つけたくない。それが彼女のスタンスであり、健気に槍を振るって戦うその姿に心打たれる者も多い。

「地球は私たち人類の大切な星なんです。手を引い

ていただけるのであれば、私から「機関」に最大限の……きやあつ！」

が、少女の言葉は途中で途切れた。

頭上から飛来してきた黒い衝撃波が自分の目の前に着弾し、大爆発したのだ。

とつさに防衛魔法を展開シタメージは抑えられたが、目の前にいた十体以上の異形たちは衝撃波の直撃を受け、全員跡形も残らず消滅してしまふ。

「敵と呑気におしゃべりとは、ずいぶん間抜けなヒロインもいるんだな」

声は上から響き、直後に目の前に着地した少女の口から続く。

二振りの剣を手に、黒い服を身にまとう銀髪の碧眼少女。

変身ヒロインだ。

「これが敵の攻撃だったら、お前間違ひなく死んでるぞ」

剣の切っ先を向けて言い放つ黒ヒロインの姿に、リーベルチェはヒロインデーターベースからその存在を思い出し。

「黒いコスチューム、双剣の銀髪ヒロイン……まさか……！」

「熾滅斬姫サベツジアイ。出会った不運を呪つて消えろ」

それに応える形で、彼女は口上とともに名乗りを上げる。

サベツジアイ。

リーベルチェたちと同じ変身ヒロインであり人類の平和に寄与する点では変わらないはずだが、彼女は並み居るヒロインとは一線を画している。

ふつう、ヒロインは人を「守る」ための戦いをするものだが、サベツジアイのそれは敵を「殲滅する」ことであつた。

今もこうして、動けない敵を横から皆殺しにした

ように。

そんな彼女へ、白のヒロインは警告する。

「サベッジアイ、彼らはすでに戦闘不能でした。それをこんな、残酷な……私たちは地球と人類を守る事が目的であって、決して敵の殲滅ではないはずです」

「結果的に守れてるだろ？ 何が不満なんだ」

不遜な態度で返す黒のヒロイン。

日本に攻め寄せてきた敵の二割はサベッジアイが単独で撃破しているとのデータもあり、戦績だけなら他のヒロインに大きく水をあけている。

とはいえそのやり方は人や建物を巻き込んでも構わない、平和のためには多少の犠牲もやむなしといった苛烈すぎるスタンスであり、「機関」でも問題視されている要注意人物でもあるのだ。

「徹底的に殺さなきゃ、こつちがやられるだけだぞ。私たちは戦えない人間の命を預かってるんだ、迷う必要なんてない」

「ですが……！」

無意味に命を奪いたくないのだ。

彼らだつて敵とはいえ生きている。無下に命を奪つてしまふなど、命を守るべきヒロインの使命に悖る。

リーペルーチェはそう懸命に説くも、サベッジアイは頑なに受け容れない。

「外科手術的に考えてみる。殺せば敵はいなくなる、敵がいなくなれば平和に戻る。それだけの単純な道理なのに、そこから目を逸らしてるバカが多すぎる。ちょうど目の前にもな」

「それは最終手段のはず！ 武力と殺戮は憎しみを招くだけですつ！ 話し合いと相互理解こそが平和の……」

「黙れ。お前みたいなヒロイン気取りの偽善者は、一番気に入らないんだよ！ ちょうどいい、ここで

潰してやる！」

「い、言わせておけば……つ！ あなたこそヒロインの皮をかぶつた殺戮者です！ もう許しません、私が成敗します！」

言い争いはどんどんヒートアップし、ついに決定的な対立を招いてしまう。

偽善者とまで言われれば、温厚なりーペルーチェも黙つてはいられない。

張り詰めた空気が、荒廃した街に流れ。

槍と双剣の切っ先が交錯し、本来あるまじきヒロイン同士の戦いが始まる。

「行くぞッ！」

先に動いたのはサベッジアイだった。

双剣を握った腕を翼のように大きく広げ、地上スレスレを低空飛行しながら一直線に詰めてくる。

(近寄らせたらダメです！)

「ピエタスバード！」

天に突き上げた槍の穂先から幾筋の白い光の剣が降り注ぐも、サベッジアイはお構いなしに猛進。

「効くかッ！ 薄っぺらいんだよ！」

光の雨を強引に突き破り、リーペルーチェの懐に入つて怒涛の攻めを敢行するダークヒロイン。

「ほらほらどうした！ 自分が正しいんだろ、証明してみせる偽善ヒロイン！」

(つ……強いつ！ 手数が多い……！)

無数に黒の剣閃が残る息つく間もない苛烈な攻撃に、リーペルーチェは槍の柄で防戦一方を強いられる。

いったん距離をとつて補助魔法を積みみたいところだが、サベッジアイは攻め一辺倒で絶えず詰めてくるため難しい。

「やあッ！」

「ぐっ……！」

やがて黒の双剣少女は、強靱な脚力で槍を蹴り上

げ武器ごと相手を空中高くに吹き飛ばすと、自分も飛んで追撃。

「身の程を——思い知れ！」

(な、なんて力……！)

サベッジアイの双剣に、ドス黒い魔力が凝集していき。

それを目にも映らない速度で振り回し、空間が歪むほどの多重暗黒波動をリーペルーチェに直撃させる。

「ユーバヘープリヒ・シユタルカヴィント！」

「つ、ああああああ——ッ！」

黒い暴風が白のヒロインをズタズタに引き裂き、コスチュームが半壊させられ大振りな胸や張り出した尻があらわになる。

リーペルーチェは強かに大地へ叩きつけられ、遅れて槍がクルクルと回転しながら彼女の背後の地面に突き刺さつた。

「あああ！ ううっ……ま、まだ……！」

息も絶え絶えで起き上がり、槍がどこにいったのか見回そうとして。

喉笛に、双剣の片方が突きつけられた。

「もう終わりか、偽善者」

血の気がさあつと引く。

完敗ともいえる敗北感と、死が目の前にある恐怖感で動けない。

サベッジアイは息一つ切らさず、無慈悲な刃を白い喉へ向けながら言った。

「変身ヒロインは学芸会じゃないんだよ。綺麗な衣装で綺麗ごと言いたいなら舞台の上でやってな」

「うぐ……っ」

悔しいが、全く歯が立たない。

これが人の心を捨てて修羅になった変身ヒロインの強さかと、リーペルーチェは全身の細胞で理解する。

# 魔法少女カナタ

恥辱のデスマッチ

ほむらりゅう

小説 / 火村龍

挿絵 / ササマシ

不屈な少女の正義は  
女帝に砕かれ……!?



その街は魔法少女たちの抵抗の末に魔族の手に落ちた。

廃墟と化した街の中心に、闘技場が建てられた。魔族の闘技場が建てられた。闘技場の中心にはリングがあった。ロープで囲まれ、ライトで照らされていた。選手の魔法や飛び道具が観客を傷つけぬよう、強固な、透明な結界で覆われていた。試合は毎晩のように開かれ、多くの魔族が、試合を見ようと詰めかけた。

闘技場の選手になれる者は限られていた。強い女でなければならなかった。強い女でなく、美しい女、無垢な女、そういった女でなければならなかった。女の戦士たちがリングに立ち、戦う様を見せるのがこの闘技場だった。ラウンド制のデスマッチだが、決着が長引くことはなく、通常のダウンで決着がつくこともほとんどない。

選手は試合のときに首輪をつける。この首輪には淫らな呪いがかかっており、試合時間が経つにつれ、あるいは攻撃を受けると、装着者の身体は敏感になった。戦いが進むにつれ、選手は次第に発情し、最後にはどちらかがいき果てて失神した。

こんな試合に参加することをカナミは屈辱に思う。けれどもどうしようもない。ほかに方法はない。捕らわれた人々が地下にいる。男は労働を、女は奉仕を強いられている。カナミと共に捕らわれた魔法少女たちは魔力を封じられ、変身した姿で辱められている。

カナミは魔法少女だ。彼らを救う使命がある。彼女たちを解放するためには試合に出場しなければならぬ。それが魔族の出した条件だ。試合に出場し、優勝すること。魔族に敗れ、街を奪われたカナミは条件を飲むしかない。

幸いカナミには力がある。ほかの魔法少女よりもそれは強い。これまでの試合で苦戦したことは一度もない。試合開始から一分経たずに相手を沈めてきた。魔族が望む淫らな試合など一度もしなかつた。首輪の呪いが敗者に恥辱を与えるよりも早く、彼女たちの意識を奪った。

試合のとき以外で、カナミに自由はない。試合が終わると魔力を封じられ、与えられた部屋に軟禁される。そうして、外の状況も、試合のことすら、知ることができなかつた。次の試合の時刻だけが告げられ、その時間になると、対戦する相手のことをなにも知らぬまま、リングへあがった。

それも今日で終わる。カナミはリングにひとり立ち、相手が来るのを待っている。

実況の声が響く。

「試合の時間が近づいています。期待の新人選手、魔法少女カナミがリングで待っています」

すさまじい観客の数、すべて魔族だ。席はすべて埋まり、立っている者も多々いる。会場の外にもこの映像は映されていると聞いた。これだけの魔族が、おそらく自分を見に来ていると思うと、

カナミはぞつとする。彼らは期待しているのだ。カナミが敗北し、首輪の呪いを受けることを。

カナミは黒髪をショートカットにした、澄んだ、力強い目をした少女だった。からだつきは女らしい丸みを帯びてほっそりとし、乳房と尻は美しく膨らんでいた。

まだ変身はしていない。したくてもできない。カナミは契約で縛られている。呪いの首輪をつけない限り魔法を使うことはできない。制服姿で、内心を表にださず、魔族の視線を受けて平然としている。

「時間です」と実況が叫んだ。

「無敗の新人の前に立ちほだかるのは、やはりこの女！」

イリーヌ、と観客が叫んだ。最初は小さな叫びだったが、次第にその名を呼ぶ者が増え、ついに会場全体が呼びはじめた。

イリーヌ、イリーヌ、イリーヌ!!

カナミの頭上に影が差し、目の前に女が降り立った。

会場から歓声があがった。

カナミよりわずかに年上だろう、身体が成熟した女だ。つやつやとした肌、ハイレグのレオタードスーツを着、長手袋にサイハイブーツを履いている。長い髪が背中までまっすぐ垂れている。

彼女の瞳は強い印象を与えた。淫猥な試合にふさわしくない、硬派な、実直な戦士の目をしている。いままでも戦ってきた魔族の女のような、いやらし

い、にやにやとしたところが少しもない。けれども、それが逆に不気味だった。彼女のような目をした戦士がなぜ選手になっているのか。自分のようにやむを得ない事情があるか、魔族に操られているのか……。しかし、そのような気配も感じられない。

(いやな感じだわ)

とカナミは思った。

「両者、前へ」

とレフェリーが言った。リングの中央に小さなテーブルが現れた。テーブルには黒い首輪がふたつ乗っていた。首輪には子宮の意匠が施されていた。

カナミとイリーヌはテーブルを挟んで向かい合った。

実況がなにか叫び、観客が反応しているが、それはもうカナミの意識に届かない。カナミは目の前の女に集中している。イリーヌはじつとカナミを見つめて、

「こうして見るのははじめてだ」

と言った。硬く艶のある声だった。

「お前の状況は聞いている。相手のことを知らずに試合をしているようだな。わたしは公平なのが好みだ。だから、お前の試合は一切見なかった」

イリーヌは首輪を手を取った。カナミも手を伸ばした。

「首輪が不満か」

「……」

「そんなことでわたしに勝てるのか？ わたしはこの戦いを愉しんでいる。は

じめの頃は不満があった。お前のように。嫌いではなかったが恥ずかしくもなかった。こんなことは人前でするものではない。だが、あるとき気づく。わたしはこれを愉しんでいる。見られることはいい……」

「お前と戦うことは楽しみだった。勝ち続けることにも飽きた。戦いこそ見ているが、こうしてみるとわかる。お前は強い。いい選手になるだろう」

「選手になんてなるつもりはないわ。あなたを倒して、出ていくだけよ」

「そのつもりらしいな。だがいつておこう。これまでもそうだった女はいた。お前が初めてというわけじゃない。その全員がいまここに残っている。お前はまた、ここでの本当の戦いを知らない」

カナミは黙って首輪をつけた。カナミの魔力を受け、子宮の意匠がピンク色に変わった。カナミは、自分の魔力が解放され、全身に満ちていくのを感じた。

「どうした？ 怖いか、それとも楽しみか？」

「怖くもない。楽しいわけではない。あなたと一緒にしないで」

イリーヌは笑って首輪をつけた。そうして、会場に向けて、

「宣言しよう！ わたしは女帝の名にかけて、魔法少女カナミに敗北を与える。ただの敗北ではない。彼女が行ってきた慈悲の勝利など与えない。この

魔法少女にふさわしい無様な敗北、地に這いつくばり、いき狂い、失禁し、白目を剥き失神する敗北、それがお前たちの求めているものだろう、ちがうか!? しかしもし、この女帝の敗北を見たいというものがいてもかまわない。わたしを愉しませろ」

と、奇妙な宣言をした。会場はそれで盛り上がり、異様な歓声があがった。

「さあ、その姿では戦えない。変身してみせろ！」

と、イリーヌが言った。

カナミは両手を胸の前で広げた。「マジカルドレスアップ!!」

カナミは光に包まれた。会場も、魔族の歓声もすべて消えた。

光の中で変身が始まる。着ていた制服が消え、カナミは生まれたままの姿で、光の中を漂った。身内から魔力が溢れた。魔力はカナミの身体に集まり、赤いレオタードをつくった。広げた手に白いロンググロブが生まれる。手袋の手で脚を払うと紺のハイソックスが現れ、もう一度払うと白いロンググロブがソックスを覆った。腰を振る、赤と白を基調としたドレスが現れる。髪が鮮やかな赤に染まって、瞳がエメラルドグリーンに変化する。

目の前に現れたステッキを握りしめ、変身が終わる。

けれども、いつもは満ち足りた気分になる変身に、カナミは不穏な淀みを感じた。否定できない淀みだった。裸

になったときも消えない呪いの首輪の存在が、いつもより重く感じられた。いままでの試合でそんなことはなかった。緊張しているのだ。

(本当の戦い……そんなものがあるの? いいえ、落ち着くの上)

とカナミは思った。

(動揺しちゃだめ。いつもの通りに戦えば大丈夫。どんなことが起こっても、わたしは負けないわ)

カナミは、薄れていく光の向こうに、イリーヌの魔力を感じた。禍々しい魔力だ。これまでの魔族とはちがう。厳しい戦いになる。

光が弾けた。魔法少女のコスチュームを纏って、カナミはリングに立った。魔族の歓声も実況の叫びも遠くに聞こえる。イリーヌだけが目の前にいる。

「魔法少女カナミ!!」

カナミは名乗りをあげてステッキをイリーヌへ向け、

「女帝イリーヌ、あなたを倒し、みんなを解放してもらおうわ!!」

そう高々と叫んだ。

胸の奥につかえるような、拭いがたい不安があった。

はじまりを告げるゴングが鳴った。

イリーヌが距離を詰めた。広いリングで、カナミとの距離は十分にあったが、カナミがステッキをあげるよりも早く、拳を突き出してくる。

「そのステッキで魔法を放つか? だが、距離を詰めてしまえばどうだ」

カナミはしかし、その拳をかわした。イリーヌの瞳が大きく開かれて、自分の懐に飛び込んでくるカナミを見つめた。

カナミは右手に持っていたステッキを流れるように左手に移すと、拳を固めて、イリーヌの腹を殴りつけた。コスチュームの魔力障壁を破り、イリーヌの腹に拳を食いこませる。柔らかな肉の下に硬い筋肉があった。

「ぐううっ!!」

と、イリーヌは呻いて後退した。

「あなたに付き合う暇はないわ!!」

カナミは叫んで、イリーヌにさらに拳を打ち込んだ。肩、横腹、太もも……そのたびにイリーヌは声を漏らした。カナミはさらにステッキを振った。イリーヌは両腕を交差させてステッキを受け止めたが、その上から、カナミはステッキを振り抜いて吹き飛ばした。

「あああっ!!」

と床に倒れたイリーヌへ向け、カナミはさらに魔法を放った。ステッキから光の弾が放たれ、イリーヌへ直撃した。

甲高い悲鳴が響き渡った。いつもならば戦いはここで終わる。それだけ威力のある魔法だ。けれども、この女帝は沈まない。

「お、おおうっ! あおおおっ!!」

イリーヌは意識を失わなかった。しかし無傷ではなかった。明らかにダメージがある。けれども、彼女の身体に傷はない。



イリーヌは、打たれたところではなく、乳房や股間をさすって悲鳴をあげていた。レオタードにたちまち染みが広がった。

「キ、キクウツ!!」

イリーヌの嬌声は会場中に響いた。場内は興奮に包まれた。魔族は立ち上がり、拳を振り上げた。ペニスをいきり立たせていた。

（これが首輪の力……なんて穢らわしいの）

目前で苦しむイリーヌに、カナミは嫌悪感を抱いた。こんなところにいるはいけない。人々を連れてすぐに脱出しなければいけない。

イリーヌは立ち上がった。瞳が爛々と輝いている。

「いいぞ。魔法少女カナミ……意外だった、魔法を撃つだけの戦士かと思っていたが、この拳、動き、考えを改めなければならぬようだ」

イリーヌのレオタードは愛液に濡れていた。豊満な胸には乳首が勃起して浮かんでいた。

カナミは再び不安を覚える。イリーヌのあの狂いよう、もし自分が同じように攻撃に曝されたら、耐えることができるのだろうか。このイリーヌを相手に無傷で勝てるのか。

（勝てる、勝てるわ。動きはたしかに速い。でも、わたしの方が!）

「はあああつ!」

ステッキから魔法の弾を放つ。三つの弾丸が連続して撃たれる。

「その程度。次はこちらの番だ」

イリーヌは手袋に魔力を纏わせ向かってきた。魔力の弾を叩き落とす。二つ目は後ろへ流し、三つ目をつかんで握りつぶす。

と、その姿が消えた。素早く横へ回ったのだ。

イリーヌの拳を、カナミは受け止めようとした。広げた手に拳が突き刺さった。

（重い——!）

受け止めるのは難しい。カナミはそう判断して、自ら後ろへ跳んだ。

「くうつ!」

宙で体勢を立て直し着地する。

腕に痛みはほとんどない。首輪のせいで。この呪いで、痛みの大部分が呪いに変換される。呪いが身体を蝕む。

股間と乳首がわずかに疼く。しかし、イリーヌのように、叫び、転げ回るものではなかった。

「なかなかやるようだな」

「このくらい。光よ!!」

カナミは光の弾をばらまいた。先ほどよりもずっと小さな弾だ。しかし数は多い。イリーヌは舌打ちをして回避する。リングのロープ際を横に走っていく。弾のいくつかを叩き落としたが、いくつもの弾が当たった。そのうちのひとつが脚へ当たって、イリーヌはわずかに膝を落とした。

カナミはそこへ飛び込んだ。だが、イリーヌはそれを待っていたのだ。左手でカナミを打つようなフェイントを

かけて、右手でカナミの胸を狙う。

カナミは身をかがめた。手を床につき、脚を跳ね上げた。

「うけてみなさい!」

カナミのブーツの脚が、イリーヌの胸元を打った。

「くおおおつ!!」

イリーヌはまたしても嬌声をあげて、宙へ打ち上げられる。

「これで終わりよ!!」

カナミは魔法を唱えた。ステッキから巨大な魔法の光が放たれてイリーヌを呑み込む。リングの結界にぶつかり、恐ろしい音を立てながら火花を撒き散らす。魔物たちはどよめき、本物の悲鳴があがった。

イリーヌは宙を舞い、リングに叩きつけられた。

しかしイリーヌは意識があった。目を大きく開き、激しく痙攣して、

「お、おとおつ、んお、おほおつ!!」

股間を押さえて転げ回る。股間から愛液が勢いよく噴き出している。瞳は快楽に冒され、唇の端から涎が流れている。

レフェリーが駆け寄って、痙攣するイリーヌの隣に跪いた。カウントが始まった。

イリーヌはしばらく悶えていたが、やがて首を振ると、身体を起こした。

「続行!」

と、レフェリーが怒鳴った。ゴングが鳴った。ラウンドが終わったのだ。

イリーヌは立ち上がった。そうしてカナミを見た。

そのときのイリーヌの顔。汗ばんだ顔に、奇妙な笑みが浮かんでいた。

イリーヌはカナミに背を向け、コーナーに用意された椅子に座って水を飲んだ。

カナミもコーナーの椅子に座った。差し出された水を飲んだ。

勝っているはずなのに、そう思えないことに困惑する。イリーヌの顔には焦りがない。戦いを楽しんでいるように見える。その股間は濡れている。

カナミはおぞましいものを見たような感じがして、イリーヌから目をそらした。太ももをきつく閉じた。わずかに疼きがある。

（こんなのに、負けるわけにはいかない……）

とカナミは思った。次のラウンドが始まろうとしている……。

ゴングが鳴った。カナミとイリーヌは距離を取って向かい合った。イリーヌは仕掛けてこなかった。変わらず、謎めいた、なにかを期待する目をしている。

（なにか企んでいるの……?）

その前に決める!

「光よ!」

カナミはステッキを振り、光の弾を放った。

いくつもの弾を、イリーヌはやはりかわしていく。その動きが、前よりも

速いのにカナミは驚いた。イリーヌの行く先を読んで魔法を撃つのだが、それも見事にかわし、かわせないものは叩き落としていた。

イリーヌは素早く跳び上がった。天井の眩いライトを目くらましにして、カナミの頭に踵を落とす。

カナミは横にずれて踵をかわした。イリーヌの着地を待たずに、彼女の顔目がけて蹴りを放つ。イリーヌは腕でそれを受けると、カナミの脚に乗るようにして後ろへ跳んだ。

すかさずカナミは魔法を放った。  
「くうっ！」

イリーヌは叫びた。カナミの、人の大きさほどある魔法の弾を両手で受け止めるが、受けきれずにロープへ叩きつけられた。ロープが大きくたわんだ。魔法が弾け、ロープが戻り、イリーヌは宙に打ち上げられた。

(いまよ)

カナミは右のブーツに魔力を集中した。落ちてくるイリーヌへ脚を振り上げた。

そのときだった。突然、ブーツの中に熱いものが現れた。

「うっ!!」

と、カナミは叫びた。

現れたのは液体だった。やけにべたつく液体で、ソックスにしみこみながら、ブーツ全体へ広がっていった。液体はただ熱いだけではない。なぜかブーツの魔力が失われていくのだ。

「ああっ、な、なに!!」

脚を振り上げることができなかった。カナミは脚を押さえた。ぐちゅりといやな音がする。

イリーヌはリングへ着地した。そうしてカナミに背を向けて、観客席に手を挙げて煽った。観客はそれに応えて口々に叫び声をあげた。

(なにをされたの!?)

カナミは立ち上がるとうとする。ところが、

「うっっ！」

またしても現れた。今度は右の手袋の中だ。

手袋の中で、手がぬちゃぬちゃとした汁にまみれている。正体不明の液体に嫌悪感が募る。イリーヌの反応、観客の歓声、彼らはこれがかん知って

いるのだ。

「あ、ああっ! また……あああつ」

手袋の汁は量を増してきた。右手だけでなく、左の手袋の中にも同じことが起こった。

手袋の中が汁でいっぱいになって、汁はついに履き口から漏れだした。白く濁った汁だ。

「こ、これは……!」

「見てわからないか。精液だ」

と、イリーヌが言った。

「なんですって!! ああつ、き、汚い!!」

「この時間にしてはなかなかの量だ。氣に入られたな」

「どういうこと……ああつ、コスチュームの中に……く、ああつ」

「首輪だ。いったはずだ、お前は本当の試合を知らない。あいつらが射精すれば、お前のコスチュームに精液が移るのさ。もちろん、わたしに移ることもある。それは射精した者次第だ」

「そんな、け、穢らわしいわ! ああつ、ま、また! くうっ、コスチュームの力が……ち、力が抜ける……」

「そうだ。その精液はコスチュームの魔力を阻害する。だされればだされるほど不利になるぞ。わたしも新人の頃は苦しめられたものだ。

これは真剣な戦いでもあるが、ショーでもある。奴らは射精する相手を選ぶ……そう、お前の敗北を見たいようだ」

「くうう……こ、これくらい、やああつ!」

カナミは拳を振り上げたが、イリーヌは軽やかにかわした。

踏み込んだ脚の、ブーツがぐじゅりと音を立てた。

(ああつ、そんな、き、汚いつ)

「それからもうひとつ」

と、イリーヌが言った。

「わたしはまだ本気をだしていない」

イリーヌが動いた。彼女の姿が消えた。

(そんな! み、見えない!)

イリーヌの動きは凄まじかった。カナミはイリーヌの黒い残像を追うばかりで、見えたと思えば、すでにイリーヌはカナミの真横にいたり、背後に回っていたりする。フフフと不気味な笑

い声をあげる。

「ば、ばかにして……」

「お前はこの首輪の力を知らない、そうだろう?」

カナミは真横から聞こえた声にステッキを振る。しかしそこにイリーヌはいない。

「お前はわたしに勝てない。その理由を教えてやろう」

今度は背後からだ。

「この——」

カナミは振り向きざまに腕を横難ぎにした。

腕は空を切った。そうして、カナミは身をかがめて腰に拳を構えたイリーヌを見た。

「しまった……あああつ!!」

イリーヌの拳がカナミの腹に突き刺さる。コスチュームでも防ぎきれない強烈な一撃だ。カナミは痛みを予感して身を固くした。けれども痛みはこなかった。代わりに、身体中が痺れたようになつた。

「あ、あああ——ッ」

スカートを押さえて後退る。

(き、きもちいい!?)

衝撃に対して痛みがほとんどない。それどころか、身体中が熱くなつて、痛みよりも快感が強く感じられた。

(これが首輪の呪い!! ああつ、か、身体が、身体がおかしい! コスチュームが、こ、こすれて……ああ、そんな、そんな!)

カナミは身体を抱いた。コスチュー

生き残りをかけた  
恥辱のカードバトル!!

あれ?  
私なんて寝て…  
…え?

うう…ん

ここは…  
私のまじまじと  
図書館で占いの…

これは…夢?

# 邪淫遊戯

「じゃいんゆうぎ」

うふふ…  
ようこそ

ねがい…?  
そう一つの  
条件を達成すれば  
広恵ちゃんの願いが叶う  
魔法のカード

それにカードって  
あの図書館の恋占いの…  
違うわ  
あれは私が作った  
願いを叶えるカード

淫魔の  
カードの世界へ

だだれ  
ですかっ!?

条件…  
条件それは…



負ければ  
その怪物たちのごほん  
4回勝てばほっちから  
脱出してバラ色の人生

楽しそうでしょ？

ひっ

戦うの魂をかけて  
その娘とね



その綾香ちゃんと  
どっちが先にアンアン喘いで  
絶頂しちゃうか競争よ



そんな  
戦うなんて私  
家に帰してっ

血生臭いのは  
私見たくないの  
だから  
ルールは簡単



逃げようたって  
ダメよお

あぐっ

カードを  
手にした瞬間から  
もう貴女はゲームの  
参加者のな



あ  
あの…っ

頭で思えば  
便利でえっちな  
カードが3枚だけ  
使えるから  
頑張ってね♪

綾香…さん？  
こんな…



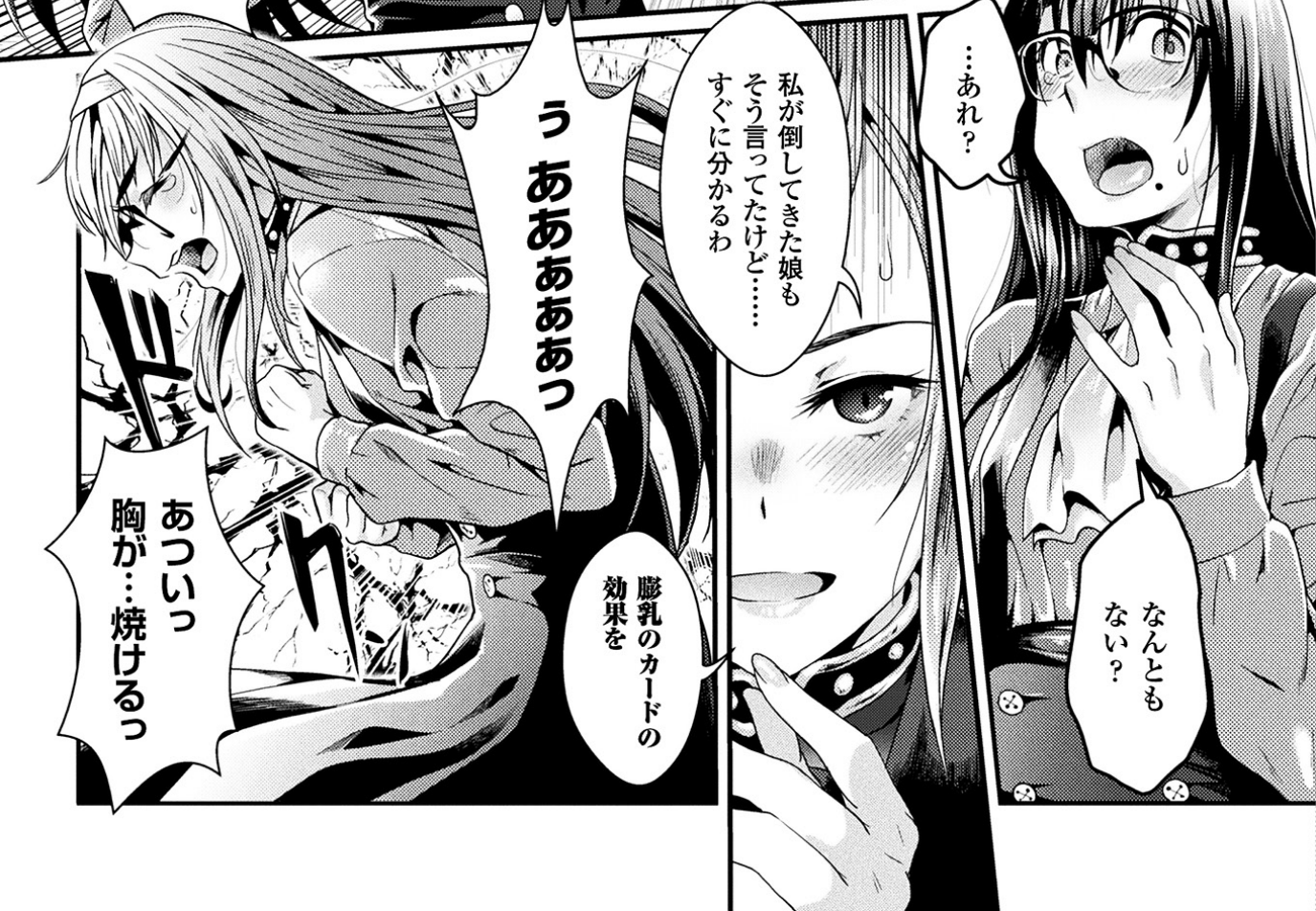
…うんわうう

もう戦いは  
始まっているのっ

…え

私は帰るのよっ  
カシのよっわっ

きゃあああ



…あれ？

私が倒してきた娘も  
そう言ってたけど……  
すぐに分かるわ

うああああ

膨乳のカードの  
効果を

なんとも  
ない？

あついっ  
胸が…焼けるっ



うめうめ

おっぱいが...

膨...乳っ!!



うぐっ



でもこのカード  
それだけじゃないの



ふふっ  
良かったね  
巨乳になれて

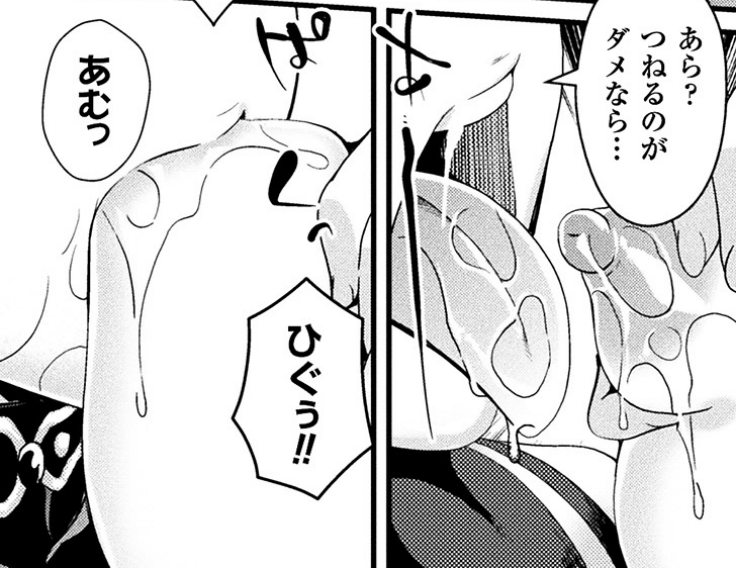
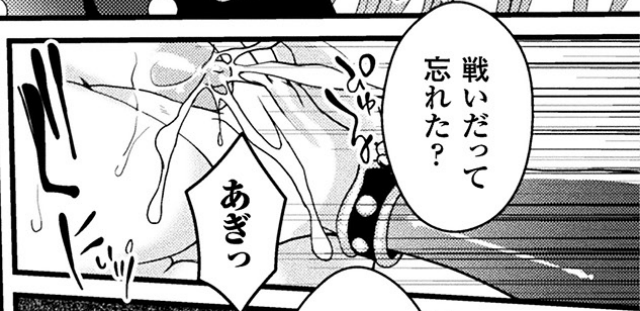


そんな...  
私のおっぱい  
こんな...



おっぱいの  
中から  
なにか...

うそ...  
そんなだって...



ダメっ  
紙めるの  
だめえ!!

なんで……  
母乳吸われるの……  
気持ちいいっ

あひっ

うきうき

ふぶん

あなた……  
処女でしょ?

はあ

おっぱい触られたのも  
初めてって感じね

あ

えっ!!

彼氏どころか  
友達もいそうに  
ないし

あっ……  
それは……



少女は渾身の一撃に貫かれ  
快感を押し殺し反攻に転じる！  
ルール無用のイカせ合い勝負！！



# 復讐の疾態闘技

せん や よみ  
小説 / 千夜詠  
NOVEL

こいかわ  
挿絵 / 恋河ミノル  
ILLUSTRATION

この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1~9の番号がふられていますので、シーン1の末尾にある選択肢を選び、ストーリーをお楽しみください。

## 【シーン1】

歓声が控室まで届いてくる。その大きさに闘技場の客席は満席になっていくのだと気付かされた。

しかし、トウカには自分の鼓動の音が最も大きく響いて聞こえる。酷い緊張感だった。大きな試合の経験がないわけではなかったが、ここには異様な雰囲気がある。

少女は一つ、落ち着かせるように深く呼吸を行った。もう少し、やっと見付けたのだ。

父親譲りの赤茶けた髪をあいっは覚えているだろうか。長い後ろ髪を一本の三つ編みにした彼女は、まだ落ち着かずに毛先を弄っている。愛らしくもある大きな瞳には似つかわしくない憎悪が燃え上がっていた。

高名な格闘家であった父。厳しさと優しさを併せ持ち、多くの門下生に慕われた彼は、トウカの自慢であった。女の子ながら憧れ、男兄弟もいなかった事もあって、彼女も格闘家の道を志した。

数年前、父は殺された。  
「分かっているわ、父さん」

眩しきながらぐっと拳を握り締める。殺した相手は、流れ者の道場破り。名をオウガといった。

野獣のような気を纏い、鉄のような肉体をしたそいつと父は死闘を繰り返して、破壊の衝撃が腹部から背中へと突

き抜けたその時、勝負はついた。

いまわの父の最後の教えは、決して恨んではいけないというものであったが、どんな辛い修行よりも難しかった。

仰向けに倒れ込んだまま、二度と起き上がる事のない父の手を握りながらトウカは涙を流し続ける憎悪の瞳をオウガに向けた。

「許さない……。お前を絶対についつか必ず、復讐を果たす！」

冷淡な表情のまま、オウガは答える。「いいだろう、追いかけてくるがいい」

道場の看板を奪い去っていった男の背中を忘れない。

「たとえ、どんな虚しい結果に終わろうと、仇を討つまでは、私は前には進めないの」

門下の仲間や母が止めるのも聞かずに、武者修行とオウガの行方を捜す旅に出た。そして数年の時を経て、ようやく男の居場所を突き止める。それがこの国だった。

たとえ仇討ちであろうと、殺人はご法度であるこの国で、オウガは闘技場の覇者として君臨し続けていた。ここでは、対戦相手を倒す為なら、何をしても許される無法の場所であり、ここでの殺しは罪にならない。

毎週行われるルール無用の闘技会は国民の最大の娯楽となっている。

直ぐに参加を決めたトウカは、運営の者に、闘技場内でのあらゆる仕打ちに抗議しない誓約書を書かされ、控室へと通され、今に至るのだ。

旅の装束からトウカは着替える事に

する。取り出したのは、家から勝手に持ち出してきた先祖代々にわたって受け継がれてきた道着であった。

もはや、名も忘れられたその道着には、伝説があり、トウカの流派、天星破龍拳の開祖が悪鬼を滅した際に、帝より頂いた品だと言われている。

黒いインナー、上はスポーツブラに下はスパッツ——スパッツの内側には何も身に着けていない。激しく動き回ると擦れるからだ。その上に白の道着を着込んで帯を締めた。シューズの紐を確認して、使い慣れたグローブで拳を叩く。

「よし……。この道着で、父さんの仇を討ち、我が天星破龍拳の屈辱を晴らすよ」

これも伝説の道着のお陰なのか、気合を入れ直した途端に、嫌な緊張感は吹き飛んで、自信が漲ってくる。

丁度そこに、係員が順番を告げに現れた。

いよいよ、闘技会のデビュー戦となる。そして、これは復讐への第一歩だ。仇の男は、王者として君臨している存在。戦い、勝ち、実績を残さなくては、挑戦する権利は与えられない。

もう一度、呼吸を整え直すと、トウカは控室を出て、闘技場へと向かう通路を歩き始める。徐々に観客の声が大きく聞こえてきて、アーチを潜ったその時、大歓声となって、降り注いできた。

「レッドゲート、流浪の女闘士、トウカ——」

アナウンスが聞こえ、観客の視線が一気に集まってくるのが分かる。

——凄いな。なんて、大勢の人たちが観戦に来ているの。

事前に碌に情報を集めずに、逸る気持ちで出場を決めたから、まずは闘技場の広さに驚いた。超満員の客席では、おそらく一万人を超えている。

歓声がこれ程までに沸き起こっているのは、珍しい女性の出場者である事も一因だ。しかも期待以上に可憐な容姿の少女であるのだから、客席の男達のテンションは上がっていく。

闘技会はショービジネスの側面もあって、トウカも手の一つでも振ってやればいいのだが、雰囲気呑まれそうである余裕はなかった。

「ブルーゲート、剛力ピースト、アンドレ——」

反対側から現れたのは、褐色の肌をした大男。筋骨隆々として、頭は剃り上げ、上半身は裸という姿であった。見せかけただけの筋肉ではない。全身に無数に残っている傷痕だけでも歴戦を感じさせ、強者の纏う闘気がトウカには確かに見えた。

——初戦から、手強そうね。でも私だって、旅の間に幾多の強者を倒してきたのよ。

これだけの観客の前で戦うのは初めてであったが、侮れぬ相手の登場のお陰で、かえって集中できそうだ。

「仕えている魔界のロリ王女に懐かれ、幼馴染の騎士美少女といい仲間になっている夢を見た。体に落書きされて犯されているお姉さんを助ける夢を見た。うん、そろそろ、やばいな、俺」実話です。

両者が中央へと向かい、対峙するとその体格の違いがはつきりと分かる。

「はは、お嬢ちゃん、さっさと降参しておいた方が、痛い目をせずに済むぜ。抵抗しなけりや、優しくしてやる」

何を言っているのだ、この男は——下卑た笑みと何処か劣情の籠もった瞳が全身を舐めるように見詰めてきて、刹那、トウカの中の乙女が怖気を覚えた。「貴方こそ、恥を掻く前に、棄権したらどう？」

「言うね。気に入った」

開始の銅鑼が鳴らされる。

見た目通りなら、力比べになればトウカが圧倒的に不利になる。飛び込んだ少女は、掴んでくる男の腕を踏み付けるようにして飛び、上体の下がった頭にしなるような蹴りを食らわされる。鈍い衝撃音が響き、男の体勢が崩れていった。

鮮やかな先制攻撃を決めたトウカに、観客は唖る。スピードなら、少女の方が圧倒しているのは、素人目にも明らかだった。

——よし、いける。

相手からすれば、ちょこまかと動き回る鬱陶しい攻撃を続けて隙を窺う。正拳による突きは、わざと軽くして、敵の焦りだけを膨らませてやった。拳は大した事はないと思わせたところで、練り上げた気を込めた掌底をぶつける。と、男のガードが下がる。

——今!

螺旋の捻りから、首筋へのハイキック

ク。確かな手応えを感じ、勝利を確信してしまつた。

「やるな……、だが——」

狙われる事が分かつての誘いだつた。会心の蹴りで、終わらせたと思つてしまつたが為に、刹那、回避が遅れたトウカ。

掴み取ろうとするアンドレの指先が逃げ遅れた足にかかる。不利な体勢から鉄球のような拳が振り上げられたのを見て、咄嗟にガード。

衝撃を逃がしきれずに、腕が痺れ、呻きながら地に倒れ込んだ。

まずい——逃れる為に、もう一方の脚を鞭のように叩き付けようとするが、歴戦の男はそれを読んで、そちらも掴まれてしまう。

「こ、この——」

足首が握られ、巨体に持ち上げられる。逆さにされたところから、今度は頭から地面に叩き付けられそうになつた。首を曲げて脳天へのダメージは回避したもの、今度は両脚とも掴まれるまでマングリ返し格好で、大きく股間が広げられてしまつた。

道着が肌離れて、スパッツ一枚の下半身が丸出しになる。確かに晒していた場所ではあつたし、足技のたびに大きくは開いていた。

しかし、この格好は、どう見ても女の子の大切な場所へと視線を集中させる卑猥なものだ。

びっちりした素材で、小柄な体形に反してむっちりとした尻の球形がその

まま現れている。擦れるから、と嫌つて、下着をつけていないから、牝裂まで浮き上がつていた。

「いいぞ、もつとやれ——」

観客の興奮の質が変わつた。戦いへの高揚から、劣情を感じさせるものへとなり、欲望に満ちた期待感が闘技場を包みだしてきた。

「い、いや……つ、この、離せえ!」がつしりと剛腕に足が固定されてしままい、アンドレのニヤニヤとした顔が股間へと近寄ってくる。

「くく、牝の匂い……、ガキのような見た目のくせに、こはしつかりと女じゃねえか」

激しく動き回つた事で、全身が汗ばんで、鼠蹊部は蒸れていた。間近から注がれる視線が、乙女の羞恥を揺さぶり、更に男が舌を伸ばして、スパッツに滲み出る汗を舐めてくるので、気の強いトウカも半分、涙目になってくる。「こ、この変態め。神聖な戦いの最中に——」

「おいおい、ここはルール無用の闘技場だぜ。何をやっても許されるのさ。殺そうと、犯そうと、な」

「く……」

逃れようと上半身を身じろぎで揺らす。すると、道着の前が開いてしまい、胸元が覗けてしまう。色気の少ないスポーツブラに包まれた健康的な柔肌の乳房。トウカは小柄で、そこは決して巨乳というわけではなかったが、それでも十二分に男を駆り立てる釣鐘状の

膨らみを持つていた。

瑞々しい少女の汗ばんだ肌の香りが放たれ、アンドレは堪らずに、覆い被さつてくる。

——寝技? ちょ、これって……。

関節を極めにしたわけではなかった。抱き付いてきたアンドレは、臭い口元をトウカの首筋に寄せると、涎も漏れそうに舌を伸ばし、舐め回してくるのだつた。

「ヒイ……、気持ち悪い——、や、やめる……、う、うう……」

ペチャ、ペチャ……、いやらしい音が耳元で響き、少女は泣きそうに顔を顰める。

腕を振り上げ、何度も男の体に拳を叩き付けるのだが、アンドレは更に興奮した様子で、抱き締めている手の一つを移動させ、お尻を撫で回してくる。「へへ、俺はついてるぜ。こんな可愛くて、エロい嬢ちゃんと戦えて」

悪寒を覚えていると、今度は股間を擦つてきて、スパッツに浮き出ているワレメに沿つて指先がぐりぐりと押し込まれてしまう。

「ひいひい——ッ!? や、やめなさいよ」他人に触れさせた事のない領域が弄られ、乱暴な指使いに痛みと恥辱が膨らんでいく。

——こんなところで、辱められて負けるなんて、絶対に嫌。アンドレは、もはや完全に、勝利よりも痴漢行為を優先していた。

異常な打たれ強さを持った対戦相手

に、このままでは、肉体を好き放題にされてしまう。

卑怯だが股間に攻撃を加えてみる。

↓シーン2 P 078へ

我慢して耐えて、機会を窺う

↓シーン3 P 081へ

## 【シーン2】

鼻息を荒くし、両手でスパッツに指先をかけて、いよいよ興奮を高めてきたアンドレの腰が浮き上がる。その隙を見逃さなはずはなかった。

「このお——っ！」

思いきり蹴り上げた脛が男の急所にクリーンヒット。

睾丸に受けた衝撃に真つ青な顔となったアンドレの拘束が緩み、トウカは素早く逃れて、今度は油断なく、立ちあがった。

蹴り上げた際、男の指がスパッツにかかったままで、所々が破れてしまつたが、焦りと頭に血が上つていて、気にしてられない。一番見せちゃいけない股間部すら裂けていたのに、だ。

「う……、こ、こいつ……」

呻きながら股間を押さえ、上半身を地に這いつくばるようにした男の額から脂汗が滲んでいる。

「ど、どうやら、そこは鍛えていなかつたようね。ルール無用なのでしょ。

遠慮なしにいかせてもらうわ」  
高く足を上げ、顔を目掛けて蹴り込んでいく。

「ほら、好き勝手にお尻まで撫で回して、存分に礼をさせてもらう」

バシ、バシッ！ 何発も顔面目掛けて蹴り込んでいくと、巨体の男の瞳から涙が滲み、自信満々だった表情が情けなく変化していく。

「うふふ、いいさま……」

小柄で可憐な容姿の少女が、大男を一方的に痛めつけている状況に、観客もやんやと歓声を送ってきた。

「ハア、ハア、んふふ……」

声援が心地よく、むしろ、気分が高揚として、雰囲気のにめり込んでしまふ。

——どうしたの？ 物凄く気分が悪い。それに、蹴りの威力が上がっているような……。

踏み付けるような蹴りから、今度は額の側面を痛打させる。

「ぐあ……」

アンドレの巨体が浮き上がり、横に転がり、仰向けとなった。

もう反撃などさせるつもりはない。相当のダメージを受けた男は直ぐには立ちあがれなかった。だから、瞳を細めながら、ふん、と鼻を鳴らし、悠々と近付くと、何処か蔑むように見下ろしている。

——いくら、下衆な奴が相手でも、戦士に対してこんな態度……。やつぱり、私、変だわ。

散々、頭部を狙つたせいで、アンドレは両手で顔をガードしている。がら空きなのは下半身だ。

「え、嘘……」

彼のズボンの股間が異様な膨らみを見せている。興奮して大きくなつていったのだ。

「うわ——」

汚物を見る目付きをしていた。恥ずかしい格好から見た股間、弄つた柔らかな体、牝の体臭、彼を刺激する要素は色々と考えられたが、直感的にまた別の理由と思つた。

気持ち悪い——そう感じながらも、靴を男の股間に乗せている。

「真剣勝負の真つ最中に、痴漢行為したあげく、今度は一方的に攻められて、ここをこんなに大きくしたわけ」

擦るように靴底で勃起したそれを撫でていた。すると、ピクンと跳ねてくのが分かる。

「う、うう……」

呻くばかりの男は、いい気になつて体を弄ってきた時とは違って、哀願するような瞳を向けてきた。そんな反応が、少し可愛くも見えてしまう。

靴を脱いで、一瞬、優しく微笑んで見せた次の瞬間、強烈に蔑む表情に変えて、ぐりぐりと体重を乗せて踏み付けてやつた。

「うおっ……、や、やめ……」

「はん、また硬くなつてきてる。やつぱり、貴方……、痛めつけられて興奮してんじゃないの？」

びくつとアンドレの身が震える。  
「え？ 凶星……、ぶ……、ぶはははは、はあ、変態」

僅かに足を上げて、そこから連続して男の股間へと蹴り込んでいった。

ドス！ バシッ！ 男の恥ずかしい場所を攻め続け、それが勝負とは関係のない行為だと自覚しつつ、止められなくなつてくる。

——なんたる……、物凄く、楽しい……。ハア、ハア……。

確かに、そこは男の急所であろうが、アンドレだって、その気になれば逃げられないはずはなかった。

「あう！ お、おっ……」

しかし、彼は一方的にやられるばかりで、苦痛を示す表情なのに、唇から涎を漏らして、それは、何処か恍惚ともれた。

「ハア、ハア、ハア……、ああ、信じられない。私みたいな小娘にチンポ蹴られて、むしろ、興奮つて——」

——私、いつたい、何を……。やだ、チ、チンポって、言つた!?

観客席に向かつて、大声で叫ぶ。

「みんな——、このド変態のマゾ男つ、どうしてやればいい？」

返事は直ぐに返つてきた。

「金玉潰せ——」

「もつと、足で責めてやれ！」

「そのままマゾ野郎をいかせてやれ」

自然に口角が上がつていった。

「いいわね、それ……」

この間に逃げ出せばいいのに、まる



いつもいつも  
邪魔をして！  
本っ当に  
目障りですわ

ヴァージニア・  
ヘルシング！



君こそ  
人を襲うのは  
やめなさい

吸血鬼vs吸血鬼狩りの  
エロバトル



吸血鬼  
カーミラ！

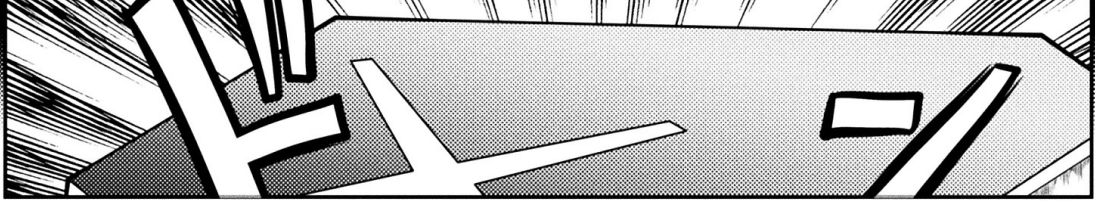


# ドーン・オブ・ DAWN OF THE VAMPIRE ザ・ヴァンパイア



結局  
昨晚も  
お食事  
できません  
でしたわ



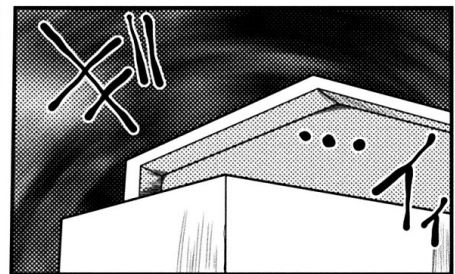


……



さして  
それでは

じっくりと  
味わってあげ  
ましようね♡



どうして  
貴女がここに  
いますの!?  
またわたくし  
の邪魔をしに  
来たのね!

君が勝手に  
連れて来た  
のだから

そんな  
いつもと違う服  
を着てるからよ  
まぎらわしい!

昨日君が  
破いたからだ

綺麗なお顔の  
くせに生意気な  
態度なこと!  
キー!!

しかし…

私は女だぞ  
何を言ってるんだ？

こうして  
あらためて  
見ますと

わたくし好み  
のお顔と肉体を  
してますわね

おだまり  
なさい！

体の  
痺れが

吸血鬼には  
人間の性別など  
どうでも良い事  
ですよ

な…ッ

吸血鬼狩りを  
意のままに…  
いいじや  
なあい♡

そうだ！  
決めましたわ

貴女を下僕に  
しましょう♡

…誰が君の  
下僕になど

ツツ！！



まずは  
わたくしに  
歯向かった

罰を受け  
なさい!

ほらほら  
踊りなさい

はあっ

まずは  
わたくしに  
歯向かった  
ことを反省  
しなさいな!

ふふり  
その反抗的な  
お顔がいいわ

暴力で屈する  
ヤワな子では  
ないわよね  
それは承知  
してるの♡

く...っ

はっ  
はっ  
はっ



だから

今度は優しい  
快樂をあげる

わたくしの力で  
癒やしてさしあげ  
ますわ

や...め  
あつ

くす♡  
敏感です  
こと♡

綺麗な肌が  
傷ついてしま  
いましたわね



何を...  
バカな



これなら  
ムチなど  
なくとも  
墮とせ  
ましたわね

# 秘密捜査官レイ

淫辱の地下闘技場



淫臭漂うリングの上で  
捜査官の性技が試される!

小説 NOVEL しもやまだ 下山田ナンプラーの助 すけ

挿絵 ILLUSTRATION はっせん 8000

「はあ、はあ……どう？ 私のこのつ、パイズリ……フェラは？」

「う、おおお、出るっ、射精する……っ！」  
女の色づいた声と男のうめき声が、地下の闘技場で重なる。

格闘技で用いられるようなリングの上で、半裸の男女が絡みあっていた。

しかしそれは互いを愛し快楽を貪る情交の類ではなく、先に相手を強制的に絶頂させたほうが勝ちであるというバトルファック。

女のほうは豊満な身体を最大限に強調するようなパイズリを身にまとい、百センチを超える豊満な胸で男の肉棒を左右から圧迫し射精へと導く。

これまでの戦いで長く美しい金髪はやや乱れ、黒のスーツと対称的な白い肌には汗が浮かび上がる。

日本人離れた美女の奮闘に、周囲の観客の興奮もうなぎ登り。

その中で一人だけ不敵な笑みを湛え自分を眺める初老の男に向かって、彼女はパイズリしながら鋭い視線を突き刺した。

（こんな奴らの遊びに付き合っていないわ……必ずあの子を助け出して、組織ごとあなたを潰してやるんだから）  
白熱した雰囲気の中、金髪の美女はこうなった経緯を思い返していた。

数時間前。

地下に一つの影が、音もなく動いていた。

影の名は五十嵐レイ。特命を受けて

組織や国家に潜入調査することを生業とする、いわば秘密捜査官。

年齢こそ二十三歳前後と見られる若い女性だが、海外の軍人を父に持つハーフであり銃の扱いや身体能力の高さは並みの男など足元にも及ばない。

彼女自身の志願により、レイは今、長きにわたり追い続けてきた犯罪組織のアジトへ潜入し暗躍していた。

ドラッグの密輸から人身売買まで、海外と手を結び幅広く悪事を働くシンジケート。

そのボスである東郷幸正の確保こそ、自分たち捜査官に課せられた目下の最優先事項。

これまでの地道かつ懸命な切り崩しにより弱体化の一途を辿ってはいるものの、頭領である東郷を潰さない限り組織は何度でも盛り返してくる。

「なあっ！ 誰だ貴様……うぐっ！」  
「くそっ、ボスに連絡を……がっ、あ……」

敵に見つかっても動じず、銃と体術で淡々と彼らを「処理」していくレイ。

彼女は黒のラバーズを身にまとい、その前側は大胆にも全開にしており百二センチの豊満なバストが半分以上あらわになっている。

身体にフィットしたスーツは動きやすさはもちろん、レイの場合は日本人離れしたその女性美を存分に引き立てることに一役買っている。

男の目を惹いて動きを止め、その隙に押さえ込むといった戦術的な意味合

いもあるのだ。

彼女自身も自分の肉体がそういう意味での武器になることを熟知した上で、露出過多な格好をしている。

それもこれも、任務のためだ。とはいえ、巨悪の組織に単身で乗り込むのは危険も大きく。

そうせざるをえない理由が、レイにはあった。

（……もう少しだけ耐えていて巴。すぐに助けてあげるから）

このアジトには半月前、別の女性捜査官が先行して潜入していた。

安藤巴。レイにとって同僚の枠を超えた大切な存在で、唯一と言ってもいいほど信頼していた女性だ。

突き止めたアジトに潜入を試みてもその連絡がつかず、おそらくは組織に捕えられているのではないか、というのが「本部」の見解だった。

大勢で突入して組織にそれを悟られれば、巴がどうなってしまうか分からない。そのためレイは単独での潜入を具申し、隠密に敵の懐へ潜り込んだのだ。

まずは巴の安全を確保。その後、少し離れた場所待機している本隊に合図を送り一斉にだれだませる。

ハーフかつ軍人気質ゆえ、本部でも浮いていたレイに初めてまともに話しかけてくれたのが巴だったのだ。なんとしても彼女を助けつつ組織を潰したレイにとつて、これが最善の方法であり、かつ自分にはそれが可能だと確

信している。

「なんだお前！ この……ぐえっ！」  
「まったく、いくらでも湧いてくるわね」

見つかって東郷に連絡されたら終わりなので、焦らず確実に一人ずつ「落とし」て奥へ奥へと進むレイ。

ふと、一つの扉の前で彼女は小さな異変に気がつく。

（この部屋から女性の声が……）  
人身売買も手がける組織のこと、捕らわれているのが巴だけとは限らない。

特殊ツールで静かに開錠し、わずかな隙間からまずは内部を覗き込み。（なっ……！！ 巴……）

捜査官の瞳が、そこで見開かれる。隙間の向こうには、かねてより再会を望んだ同僚であり友人の姿があった。

しかしそれはレイが思っていた巴ではなく、そうだとするにはあまりにも変わり果ててしまっている。

「ほおっ、おほうっ！ しゅきっ、ちんぽ好きっ、クスリキメラれてぶつといちんぽハメられるのすきっ、おほおっ、またっ、またイグっ、イグっ、んおっほおお、いつぐうううう！」

焦点の合っていない眼に涙を浮かべ、レイほどではないが充分に大振りな胸を揺らし、男たちの二穴責めに仰け反って派手に絶頂する若い捜査官。

あたりには注射器やパイプが散乱しており、何をされていたのか想像に難くない。

「キメセクっ、キメセクさいこお

お！ こんなの戻れにやいつ、ふつうのセックスなんかできないいい！ イグのとまんないっひいいい——！」  
二人の男にいいようにされつつ、理性を失った表情を浮かべてその身に叩き込まれる快楽に甘んじる巴。

捜査官としての佇まいなど欠片もない、ただの淫乱な雌であることをこれでもかというほどに体現していた。

普段の明るくどこか抜けていて、そんな振る舞いが自分にとつての癒やしであり支えであった巴が、ああも変わ果ててしまうなど信じがたい。

あまりのことに気を失いそうになるレイだったが、どうにか正気を保つて銃の安全装置を解除する。

(とにかくあの男たちから、巴を助けたいと……！)

残弾を確認し、銃を構えて躍り出ようとした、その刹那。

「おっと、動かないでくれたまえ」  
無機質な細い鉄の塊が、捜査官の後頭部を小突いた。

「どうしたのかね、声をかけられるまで気づかないとは君らしくもない。エリート捜査官の名が泣いているよ」  
(しまった……！)

血の気が引くのが分かる。

聞き覚えのあるハスキーボイスが、自分の鼓膜を舐っていく。

「あるいは、それほど彼女が羨ましかったのかな」

「東郷……！」  
部下を引き連れそこにいた男をちら

と視認し、レイは切齒する。

かつちりしたスーツを着込み白髪をオールバックにした一見小奇麗な初老の男だが、彼こそが数多の犯罪行為を働く巨悪なのだ。

友人の痴態に目と思考を奪われ、仇敵が近づいてきたことにすら気づけなかった自身の迂闊さを呪う美人捜査官。

「くっ、私としたことがこんな……巴を解放しなさい！」

「……それはつまり自分はどうかになっていいということかね？ 単独で潜入するくらいだ、よほど君にとつて大事な存在なのだろう」

彼の配下に銃を突きつけられながらも、レイは気丈に東郷を目で威嚇する。

「海千山千の大悪人はその程度に怖気づくことはなく、滔々と語りだす。曲りなりにも彼女と捜査官だ。任務で命を落とす覚悟はできていたはずだし、正面突入の際に人質とされるのも捜査官としてのプライドが許さないだろう。にもかかわらず君は彼女を救うため、隠密に単独潜入を試みた」

「……」

「確実な成功よりも友の安全を望むとは、捜査官としての使命はどこに置いてきたのかね。やはり君も、感情の先走る人間の女であったようだ。いや安心したよ」

「う、うるさいわね！ いいからやめさせて！」  
頭に血が上り、銃を突きつけられて

死がすぐそばにあるにもかかわらず声荒らげるレイ。

東郷の言う通り普段は冷徹に任務を遂行していく彼女だったが、こと親友の巴が絡むと感情が先走ってしまうのだ。

それほどまでに大切な存在を盾に取られ、結果的にこうして圧倒的な不利を招いてしまう。

自分の不明を誤魔化すかのように、金髪爆乳美女は強気で東郷を睨み、悪の権化は口を開かず「ふむ」と

言いながら、美人捜査官の尖った顎をクイと指で持ち上げて要求する。「ではひとつ、私に協力してもらおうか。それができるのであれば約束どおり彼女は解放しよう。彼女は、ね」

「くっ、この外道……！」

この時点で自分に酷いことをしてくるということが明白なのだが、分かっているにもかかわらずレイには手がない。

(覚えていなさい、どんな責め苦にだって耐えてやるわ。そして巴を助けて、あとはこんな組織ひとひねりにしてやるんだから……！)

巴さえどうにかなれば、味方をなだれ込ませられる。

そうなればこの老獺な男もろとも、組織は壊滅だ。

ほんの一時耐えるだけ。決意を宿した瞳で東郷を刺し、巨悪の男はほくそ笑んだ。

「……それで、どこへ連れていく気？」  
彼の部下に後ろから銃を突きつけられ、レイは諸手を挙げたポーズで東郷についていく。

(巴を盾にされていなければ、こんなみつともないことには……)

秘密捜査官たる自分が武器を捨て敵の言いなりになるなど、屈辱の極み。暗い地下通路を延々と歩かされ、不意に視界が開ける。

「見たまえ。これが我らの望んでいる至高の娯楽だよ」  
そこは今までの殺風景な通路とは打って変わり、眩い照明と観衆の熱気が場を満たしていた。

「な……なに、これ……」  
広大な空間の中央に、プロレスやボクシングで用いられるようなリングが据え置かれ、透明な壁を隔てて観客が四方にひしめいている。

地下にこのような施設があったなど、事前調査のデータにはなかった。

レイが驚いていると、不意に少女の嬌声が耳に飛びこむ。

「ああっはあああああ——！ しゅごい、ちんぼしゅごいいいい！ 鬼頭様のちんぼ、デカちんぼすきいいい！ もっと、もっと犯してっ、敗北まんこぐちやぐちやにしてえええ！」

リングの上では十代後半と見られる美少女が、屈強な体格の男に押し倒され無理やり犯されていたのだ。

悲鳴と嬌声がこだまして、やがてビクビクと柔らかな肢体が痙攣する。

その瞬間に歓声が湧き起り、少女を犯していた男が雄叫びを上げていた。「……………」

あれが、セックスバトル。男と女でイかせあい勝負をつける非人道的な催し物であると、レイは粟立つ肌で理解する。

しかも対戦する男女それぞれに賞金が賭けられていることが、宙吊りにされたスクリーンによつて明らかだ。摘発されるべき違法賭博が堂々とい行われている。

さらに驚いたことに、透明な壁を隔ててリングを囲う観衆たちの中に、いくつも見つかった顔がある。

(なんてこと……彼らが裏でこんな違法賭博に興じていたなんて)

ニュースや紙面で見たことのある政府の高官や大企業の社長が、何人もこの場に参列していた。

捜査官という職業柄、政治家や権力者の顔を覚える必要性も多々あるゆえ、この場に見覚えある顔が並んでいることに喫驚してしまう。

「豺狼当路だとも言いたいかね？」

しかし人間など一皮むけば欲の塊だよ。この私がそうであるようにね。強い女が男に屈服する様が見たい、そのためならいくらでも金は出す。それが彼らの本心だ」

「……反吐が出るわ」

にやつく東郷の言葉にレイは一蹴するが、初老の紳士の皮を被つた我欲に忠実な外道は不穏な微笑を崩さない。

「それは結構なことだ。吐き気こそ人間にとつての存在の味であるとサルトルも言っている。つくづく君は捜査官以前に人間の女というわけだ」

「なんでもいいわ、私にもアレをやれつて言うんでしょ」

その通り、と東郷は頷く。

「観客の中にはかつて君に捜査を依頼した者もいるだろう。そんな男たちがかねてより私に頼んでいたのだよ。あの強気な美人捜査官が屈服するところを見たい、どうかしてあの顔を敗北快楽に至ませて欲しいとね。胴元としても彼らの期待に応えなければと思つていたところに、そちらから飛びこんでくれた。これも私の日ごろの行いの賜物かな」

「ひどい神様もいたものね」

ここまできたら、やるしかない。

女が男に負けてイカされる姿を見たがついてくる違法賭博参加者に、目にも見せてやるとレイは意気込む。

そしてしかる後に、東郷もろとも全員逮捕してやるのだ。

レイがラバースーツ姿のままリングに上がったとたん、機械的な声で高らかにアナウンスが流れてくる。

《本日の飛び入り参加者にして、裏社合では犯したい強気な女ランキングの常に上位に位置する超上玉……正義のために闇に紛れ暗躍する美人ハーフ秘密捜査官、五十嵐レイの登場です！》

おおつ、と周囲から歓声が上がります。

「あの五十嵐捜査官が」「噂通りの豊かな肉体だ」「あれが今からあられない姿で男とイかせあうのか」などといった下卑た声が四方から自分に降りかかる。

女を卑猥なショーの道具としか見ていない陋劣さに、レイは怒りで爪が手のひらに食い込んだ。

(今に見てなさい……バを解放したらすぐに仲間を突入させて、一網打尽にしてやるんだから)

リング前で別れた東郷から聞かされたルールは次のようなものだった。これから君の立つリングには男が一人ずつ上がってくる。

数は四人、最後の一人まで射撃させれば君の勝ちだ。方法は特に問わない。勝てば親友の身柄は解放するし、私を逮捕するなり好きにしたまえ。

しかしそれまでに一度でもイつてしまえば君の敗北だ。

まあ私自身は何もしないが、セックスバトルのルールに基づき対戦相手には好きにされることを覚悟しておいてくれたまえ。

では健闘を祈る。

「……………」

その彼は、しれつと観客席で低俗な者達に混じり、透明な壁越しに濁った眼差しを自分へと向けている。

そして、その横には。

(巴……！)

同席していた。葉のせいか表情がうつろで、レイの姿を認識できていないかのよう。

今すぐにそちらへ乗り込んで奪い返してやりたいが、ご丁寧に黒スーツにサンングラスといった記号的な男がそばに三人控えている。

(くっ……今はこのセックスバトルをしなから、機を窺うしかないようね)

迂闊に手出しできず扼腕していると、リングに東郷の部下と思しき、見た目はいかにもチンピラのようなボクサーパンツ一丁の男が出てきた。

こちらを見てニヤニヤと笑っているが、幾度も死線を越えて戦ってきたレイには彼が三流であることは瞭然。

好きでもなんでもない男を射撃に導かなければならないのかと思うと気が滅入るが、親友を救うためにはこうするしかない。

ふと先ほどのスクリーンを見てみると、自分と対戦相手の顔が出力されており、両者に賭けている人数比と賭け金の金額まで明らかだ。

(勝つてもこいつらに金が入るだけで、負けたら犯される上にこいつらの見せものになるわけだわ……)

怒りがふつふつと沸き上がってくる。当事者の心情などお構いなしで、参加者たちが楽しむための違法賭博。

こんなものは一秒でも早く潰してやらなければ。ゴングが鳴るや否や一瞬で懐に潜り込み、男をマットに引き倒してパンツ

今年で記念すべき  
第十回を  
迎え  
ました

全国学生  
陰核道選手権！

個人戦  
決勝を戦うのは  
この二人

昨日の団体戦を  
制した名門：



肉の芽学院の  
大将・副将コンビ  
です！



過去  
二連覇の  
猛者

三年生の  
神流川みさと  
選手に  
対するは……

二年生の  
ホープ

白子鳩  
安比奈選手！

先輩……

行き  
ます！

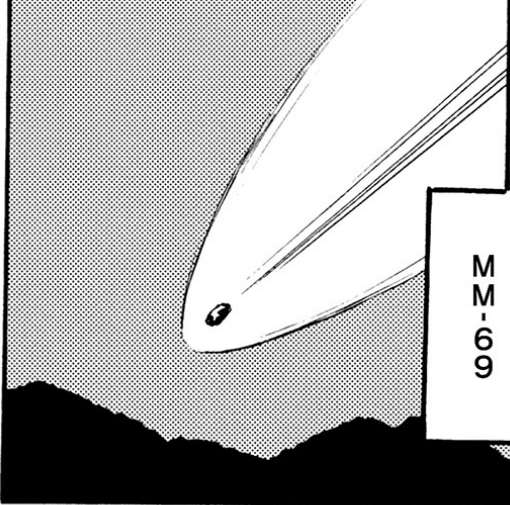
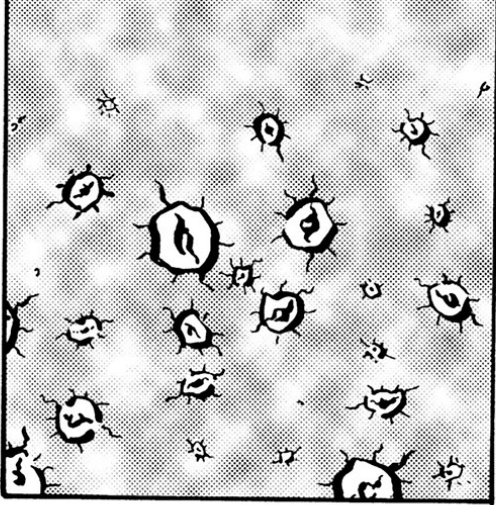
驚異のクリトリス・バトル開幕ッ

!!



前世紀末 隕石に  
附着して飛来した  
地球外ウイルス

MM-69



彼らは人体の中で  
もつとも神経が  
密集した粘膜部

すなわち女性の  
クリトリスを  
潜伏先に選択し…

海綿体の  
異常肥大と

性欲の異常亢進を  
促した

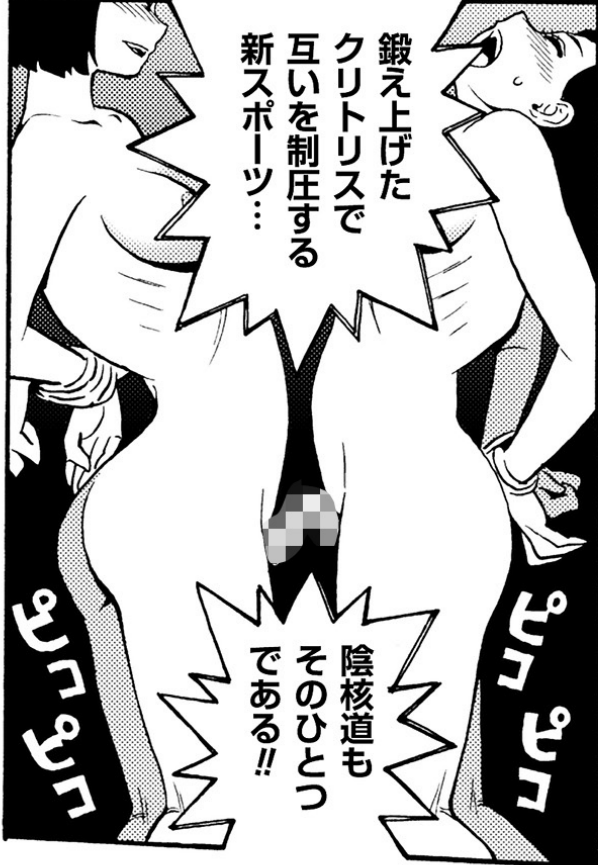


MM-69と  
共生して四半世紀

地球人女性の  
8割以上は  
巨大陰核多淫症  
となり…

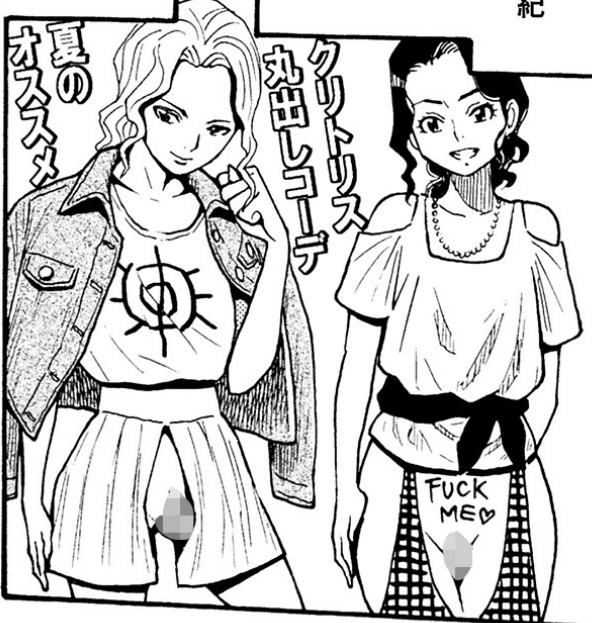
それに伴って  
様々な文化が  
開花していた

鍛え上げた  
クリトリスで  
互いを制圧する  
新スポーツ…



クリトリス  
丸出しコーデ

夏の  
オススメ





よく上がって  
きたわね  
安比奈

わたしにキッチリ  
引導を渡してくれ  
るんでしょ？

約束  
どおり

は...  
はっ

オオオオ

はっ...  
はっ

無理い  
はっ

む...

# オオオオの 陰核肥大少女症候群 オオオオ

たかとお  
漫画 高遠るい  
COMIC

ここで審判団による  
試合前の  
性器チェックです

フッヒ

フッヒ

ここまで3試合  
オール一本勝ちの  
神流川選手

キレイな  
未使用マンコ  
ですねえ

一方1回戦から  
辛勝つづきの  
白子鳩選手

ええちよっと  
コンディションが  
心配です  
チエックも  
念入りになり  
そうですね

んっ  
んん…

ええクリトリスも  
亀頭が  
パンパンに張って  
色ツヤがいい

すばらしい  
スタミナですよ  
まさに超学生級

彼女はすでに  
スポーツ推薦で  
N体大への進学を  
決めています

おおっつ  
みさとちゃんの  
マンコ♡

いはい  
いはい

役得だ

なるほど  
楽しみ  
ですね

だいぶ  
ダメージを  
受けている  
ようですが…

オラッ  
もっと  
広げろっ

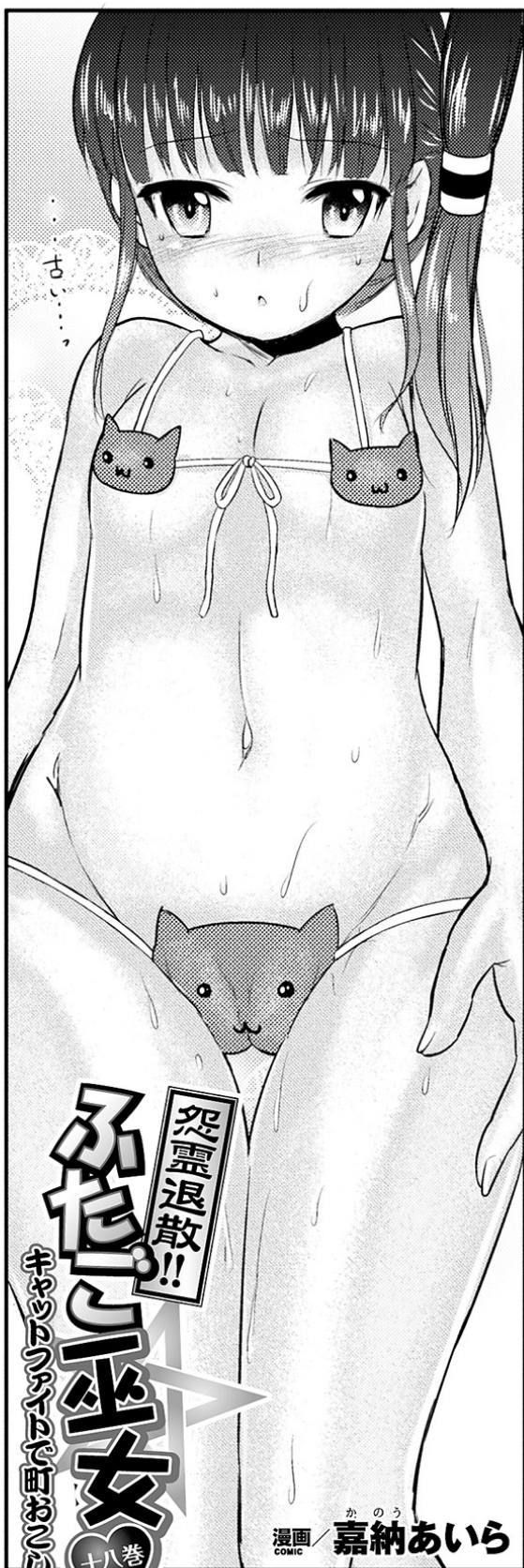
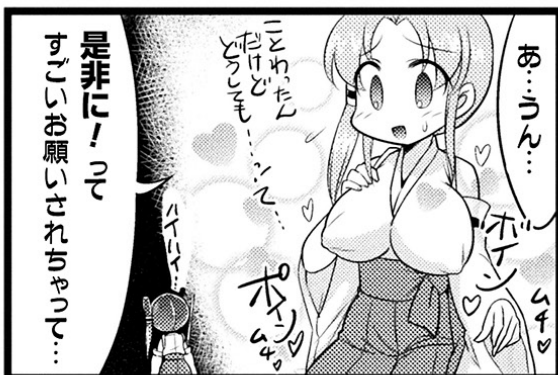
へっへっ  
ドロドロ  
だぜ

はっはい…





お姉えの特権……？



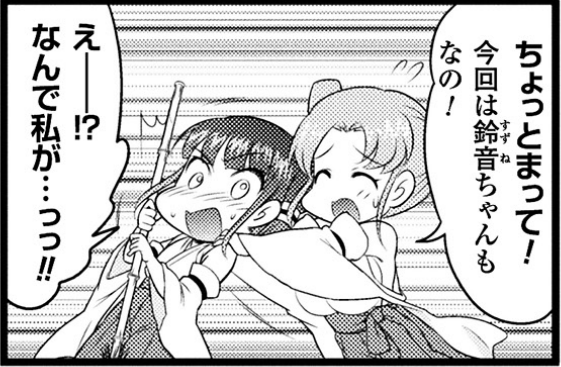
★ギリギリを攻めてキャッキャウフフのくんずほぐれっ！★

# 有●反省会でみたような?

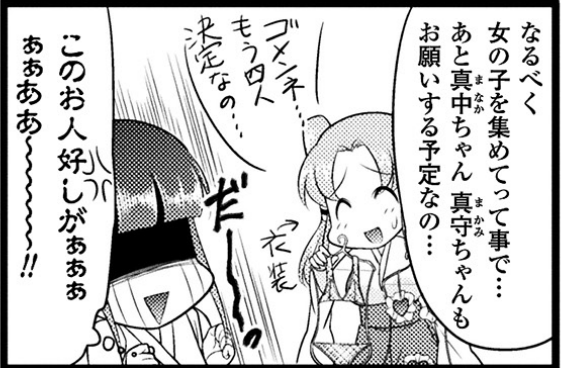
# 18歳以上推奨イベント(町おこし?)



**如月珠音**  
如月神社の双子巫女の姉。おっとり巨乳で、男の靈に憑かれやすい。



**如月鈴音**  
如月神社の双子巫女の妹。靈力は弱いがしっかり者の常識人。



**真中**  
如月神社に押しかけて居候している17歳、珠音の中学時代の同級生。





# ソフィア・ バティレード EDURECA 星皇女 VS ワトメキヲ

女だけの星の皇女 VS  
異星人のエロバトル執務!  
民を救うために  
相手をイかせて勝利を掴み取れ!

ものうきょう  
小説 NOVEL 桃生雨京  
挿絵 ILLUSTRATION ぴかっち

「まったく苦勞したぜ、ここに来るのによ。お前たちの星は宇宙航行地図には載っていないもんなあ。それらしい星に目星をつけて一つ一つ画潰しよ」

喋っているのはウトメキラ星人と呼ぶに似た異形の生物。身長は平均で二メートル。頭部に髪や耳目はない。それでも視力・聴力はヒトを凌駕する。顔の中央には豚のような鼻。口は大きく裂けており、唇や歯はない。唾内にあるのはどこまでも伸びる舌だけだ。頭から下は無数の触手で構成されている。伸縮自在、先端部を男性器のように変えることができ、おまけに射精も可能。

「だがまあその苦勞も報われそうだ。伝説通りじゃねえか、宇宙の生けるスファレライト。女しか産まれないうえ、揃いも揃って美人ばかり。おまけにムツムチで見てるだけで滾つてくるぜ」

触手の間には性器も存在する。ヒトの牡と同じ形だが、サイズは比較にならない。平均は三十センチ以上、直径は六センチを超える。竿部分には無数の珠が入っており、常に勃起状態だ。「で、どうするよ？ オレたちの全固体数は五十三万だぜ。まあ勿論ここに全員はいないが、それでも千以上はある。対してお前たちはどうだ？ ククッ、まさか後ろで怯えている百人そこそこが全てではないだろう？」

表皮はヒトの内臓のような色をしており、常時ヌメッている。使い古した油のような体臭だが、あらゆる牝を発

情させる催淫効果がある。彼らの体液も同様で、中でも精液は最も強力だ。「ええつ、当然でしょう！ 胤付をすするためだけに進化したような低俗な生物に……私たち、バティレードの民が屈するわけにはいかないわつ！」

ウトメキラの王と対峙するのはソフィア・バティレード。通年穏やかな気候で豊かな緑に包まれた小さな星、バティレード星の皇女だ。十八歳の若さだが——バティレードの平均寿命は三十歳後半、民たちの誰からも敬われ愛されている。

（といたったものの……どうすれば五十三万？ 千……？ ハツタリではないの？ 私たちは……こいつの言う通り、百人程度しかないのに）

ソフィアの光り輝く金髪は枝毛一つなく、腰まで伸びるストレート。バティレード特有のエルフを想起させる尖った耳。身長は百六十五センチ。瞳の色は深い青。切れ長の目だが目尻はやや垂れている。バストは九十五、ウエスト五十五のIカップだ。ヒップは九十一センチ。熟女さながらの量感を有しながら、弛みは一切なく、弾けんばかりのハリがある。肌は透き通るように白い。

「噂に聞いているぜ……バティレードの科学技術の粋を集めたというそのワードスーツ。オレたちの触手地獄と競うのも一興だろう」

バティレードの民族衣装は純白のドレスと編上げ靴だ。しかし今は黒一色

全身にピツタリと張りつく特殊ゴム素材で、スイムスーツのように四肢まで覆っている。首元、手首、アンダーバスト、腰まわりと鼠蹊部、足首——各部分に機械がついている。そこから着用者の神経に微弱の電流を送り、瞬間的な肉体強化を実現するのだ。また、ショートブーツにも機械が組み込まれている。反重力場を生成し、空中を自在に動くこともできる。

「あらためて訊くぞ。オレらと戦るか、戦らないのか？」

「そ、それは勿論……ッ！」

ソフィアはウトメキラ王の背後を見る。バティレード星最大の草原に、異形生物の巨大宇宙船が停まっていた。船の下部は半球体になっている。壁は一面ガラス張り。そこに無数のウトメキラ星人たちが蠢いていた。

（戦らなければいけない。ワードスーツを使えばなんとか……でも、私たちがの実戦経験は皆無に等しい——）

《皇女さま》

右耳につけたイヤモニから声が聞こえた。後ろをそつと窺う。ワードスーツを着た民たちが並んでいる。

《どうしたの？》

バティレード製のイヤモニにマイクは必要ない。頭に言葉を思い浮かべるだけで相手に伝わるのだ。

《皇女さま、お聞きください。わたしたちの総意でございます》

《やつらに犯されるくらいなら死を選

びます》

《……ッ！》

言葉にならなかつた。少女から熟女まで、誰もが恐怖から軀をふるわせている。しかし同じく誰もが、覚悟を決めたようにまっすぐソフィアを見つめ返していた。

（みんな、本気なんだわ。でもそんなことつ、絶対にさせないッ！ 私はバティレードの皇女なんだからつ！）

一瞬で考えをまとめた。彼女たちの意を汲んで、かつ助かるかもしれない方法を。

「……戦るわ」

ウトメキラの王を睨み返す。醜い口がにいつと持ち上がった。

「だけど、私とあなたの一对一よ。それを飲まないなら、私たちは今ここで自死するわ」

「ああッ……!?!」

今度は口がへの字に曲がった。荒々しい声と唾液がとんでくる。

「私が勝つたら星から立ち去りなさい。負けたら……あなたたちの好きにしていっわ。ただし、私だけよ」

王は無言だった。ソフィアの提案を反芻しているのだろうか。ややあつて、下卑た笑い声が響いた。

「ゲヒヤヒヤヒヤッ……!! まあいいだろう、肝の据わった皇女さまだぜ！」

次の瞬間、笑い声がピタリと止まった。頭をソフィアの方へ寄せてくる。

「……が、お前の条件を飲む代わりに、バトル形式とルールはこちらが決めさ



せてもらうぜ。そうだなア……一対一のエロバトルはどうだ？」

「エ、エロバトル!? なによそれは?」

「名の通りエロいことをして戦うのよ。攻守交代制で制限時間は……十分くらいにするかあ? 相手をイカせりゃ勝ち。どっちかが勝つまでのサドンデスだ。これどうだ?」

今度はソフィアが考える番だった。

「イカせる……というのは、せ、性的絶頂……のことよね? 大昔の文献でちらつと読んだことがあるわ。絶対にしたくないけれど……みんなの命には代えられないッ!」

「わかったわ。受けてたつわ」

ソフィアは敵を見据えて答えた。

「交渉成立だな! バトルの場所はお前たちに決めさせてやるぜッ!」

高笑いをしながら、ウトメキラの王は母船へと帰っていった。

「皇女さまッ!」

後ろから民たちが駆けてきた。

「みんな、聞いてくれるかしら」

「状況はイヤモニで把握しております」

話をはやくて助かった。ソフィアはバティレードの民たちを見回す。彼女たちは不安そうな表情だった。

「皇女として約束するわ。私は必ずみんなを守る。だからどうか私を信じて」

バティレード皇女は決然と告げた。人々の間に安堵の念が広がっていく。

（そう。絶対に私が守るんだから。…命に代えても、ね）

決戦の場所はバティレード唯一の戦闘訓練所が選ばれた。半径五メートルの半球体フィールド。足元には幾何学模様を描かれた特殊プラスチック製の板が敷かれている。薄紫色の電磁バリアを張り、内外からの干渉を不可能にした。今そこに、ウトメキラの王と、髪をアップにまとめたソフィア皇女が立っていた。

「はやくはじめるお! すまし顔をグチャグチャの牝面に汚してやれえッ!」

バリアの向こうには千人余のウトメキラがひしめいている。ソフィアを視姦しながら自慰をし、常時勃起肉から精液を噴きあげていた。

（こんな下品な生物に負けるわけにはいかないッ。見守っていてね、みんな）

「攻撃は私からでいいのね?」

「ああ、いいぜえ。だがよ、清廉潔白たる皇女さまが百戦錬磨のオレをイカせることができるのかア? オナニーすらしたことねえんだろ?」

相手の挑発に乗ってはいけない。わかつてはいたが、顔が赤らむのをとめられなかった。

（だいたいようぶ。パワードスーツの瞬間学習装置で太古の性交文化を頭に叩きこんだわ。…でも、本当に非効率で危険なやり方。理解できないわ）

「ピイッ! フィールド内に電子音が鳴った。あらかじめコンピュータに制限時間をインプットしていたのだ。はじまりの合図だった。」

「い……いくわよッ!」

ソフィアはウトメキラの王に近寄った。彼の前で膝を突き、四十センチはあろうかというペニスに手を伸ばす。（男性器を女性の手で刺激して射精に至らしめる……。て、手コキ、というのよね。まず……それをつ）

「ちよつと待ちな、皇女さまア」

「汁まみれの触手が両手首に絡まってきた。その感触と熱さが不快で、顔をしかめてしまう。」

「なによッ!? そつちからの攻撃は反則じゃないのッ!」

「これは攻撃じゃねえぜ? 手コキの作法をご存知ない皇女さまに、オレが教示してやろうつてんだよ」

「作法? そんなの——きゃあッ!」

「ピリリッ。手首から先のパワードスーツが破かれてしまった。」

（う、ウソッ? 特殊ゴム素材があつさり……ッ!）

ウトメキラのポテンシャルを見誤っていた。ソフィアは生唾を飲みこみ、おぞましい触生手を仰いだ。

「牡のチンポを抜くときは素手つて相場が決まってるぜ。デリケートな部分なんだからよオ、牝のやわらかい手でやさしく包んでくれないきゃなア」

大きな口から涎がねつとりと垂れ、地面にポタポタと落ちていく。

「あとな……奉仕の前には土下座だ。孕ませ汁をだす神聖な部位をさわられるんだぜ? 地面に額擦りつけてありがとうございますッ!」

「土下座ッ!? なにを馬鹿な——」

ソフィアは途中で言葉飲んだ。（無駄な言い争いをしてる場合? 私がこいつに勝てばそれで終わりなのよ。私のプライドなんか、みんなの命に比べたら……ッ!）

バティレード皇女は屈辱の土下座をした。齒軋りをしながら言葉を紡ぐ。

「ウ……ウトメキラの王さま、オチ……ンポのご奉仕をお許しください……務めさせて、いただきます……ッ!」

四方八方のウトメキラたちが沸いた。

「見ろよあの無様な姿ッ! 星の皇女さまがチンポの前に跪いてるぜッ!」

「プリップリのデカケツが最高だア! パワードスーツも軋にびつたり張りついてクソエロいじゃねえかッ!」

激しい羞恥心のせいで目尻に涙が滲んだ。それでもソフィアは土下座をやめない。

「……クククッ。嫌いじゃねえぜ、聡い女はよ」

ウトメキラの王が寄ってくる。ソフィアはゆつくりと顔をあげた。眼前には巨大な牡棒がビクッビクッと跳ねている。強烈な体臭が鼻を突いた。

（んぶっ! は、吐きそうっ……! でもそんな姿をこいつらに、みんなにも見せられないッ!）

「あ、ありがと……ごさいますッ。それでは失礼します……ンうッ!」

小刻みにふるえる両手で異形のペニスを握り締めた。手のひらに汚液が染みこんでいく。

（ううッ！ これってこんなに硬いの？ それになんて熱さっ！ ひうっ?! 手の中で跳ねて気持ち悪いッ！）

亀頭から流れつづけるカウパールのせいでソフィアの白い手はドロドロになつてしまった。いくつもの珠が埋まつた竿部分をゆつくりと扱いていく。

「ただどしどしい手つきが逆にいいぜエ。どうだあ、皇女さまよ。チンポのさわり心地は？」

「い、いいわけではないですよッ！ こんな汚らしい——」

「減多なことをいうんじゃねえぜ？ 牡つてのはな、チンポを敬ってもらえればもらえるほど、よくなるんだよ。賢い皇女さまなら……わかるよな？」

鼻先に鈴口を突きつけられた。奥から漂ってくる刺激臭に、女の脳幹がジーンと痺れてしまう。スーツの中の柔肌が粟立ち、腋や股間に汗が滲んだ。

「さ、最高の気分です。大きくて太くて、男らしい強い臭い。大変立派なおチンポ様です。ご奉仕できる喜びにうちふるえております……っ」

心にもないことを口にした。しかし、それはまるで催眠術のようにソフィアの躰に作用した。

（手が勝手に……！ ふれたくもない汚い肉を、私つ、愛おしげにッ！）

ウトメキラの巨木を両手で包みこむ。亀頭から竿の部分までクチュクチュスリスリと丹念に愛撫していく。

「ノッてきたじゃねえか！ いいぜえ、さすが皇女の手だ。絹のようにすべす

べしてやがるッ！」

牡の切っ先から快感液がドツと溢れだす。これならいいける、とソフィアは心の奥で確信した。

「口使えッ！ 舌這わせるッ！ 乳だせやおアラア！ なんのためにそこまでかく育てたんだあッ！」

バリア越しに野次がとんできた。ウトメキラの王が嗤う。

「だとよ？ やつらにもサービスしてやるか。これも王の務めだしなア？」

「やつ、やめッ！ ああッ——」

訓練場にスーツの裂ける音が響いた。ブルルンツと露わになったのは、ソフィア皇女の美巨乳。ムチムチに実った白饅頭の頂点に、濃いピンク色の牝乳首がすでに尖っている。白い肌は汗ばみ、朱に染まり、牡を惑わすフェロモンを漂わせていた。ウトメキラの歓声が次々にあがった。

「上品な顔して下品な乳房ぶらさげてんじゃねえか！ よおし、そのデカ乳でオレのを挟んでフェラチオをやれっ！ 蟹股も忘れんじゃねえぞ？」

人前で乙女部分を晒したことのないうソフィアは、あまりの恥ずかしさでバストを隠すことさえできなかつた。頭がフリーズしていったのだ。気がついてら、命令通りに動いていた。

（私ッ、こんなひどい格好をつ？ ううッ?! 胸の間にこいつのがッ！ ひううッ！ さつきよりくさいッ！）

豊乳に密着した汚ペニス。ヌルヌルの液が柔肌の上を滑っていく。赤黒い

亀頭はソフィアの口の前で脈打ち、催淫効果のある臭いを振り撒いている。（フェラチオ……調べたから知ってるわ。これを口に含んで、舐めて、しゃぶって……！ そんなこと……ッ！）

エロ躊躇をした皇女の下半身はスーツが深く食いこんでいた。下着をつけていない双臀のラインをはつきりと浮かびあがらせている。淫裂も同様で、勃起したクリトリスの場所まで一目でわかる。

「おらっ、さつきとはじめるオ！ 最初の挨拶もしつかりなあ」

ソフィアの鼻に亀頭がグリグリと押しつけられる。頭の中にピンクの霧が広がり、目の前がぼんやりした。

「ふあ、ふあい……っ！ 今度はオチンポ様に私の口と舌、胸でご奉仕させていただきますますっ！ 私の涎で汚してしまふことを、どうかお許しくださいませッ！」

思いもしていない言葉が、すらすらと口からこぼれてしまう。

（我慢よ、私ッ。こいつを気持ちよくしてイカせれば……勝ちなんだから！）

頭の中に民の姿を思い浮かべると、目の前のおぞましい牡肉に舌を這わせた。「んちゅっ！ ううっ……ちゅっ！ れろお、べろお……ちゅるっ！」

今までに感じたことのない味だった。味蕾が痺れ、唾内が牡臭で満ちた。ソフィアは逃げない。カリ首を丁寧な舐め、粘液溢れる尿道を深く穿つた。（おえっ！ 臭いっ、吐き気がするわ

っ！ なのに……あああッ、躰の奥が、お股があッ……んひいッ！）

引き締まったウエストが淫らな動きをしていた。まるで牡を誘うポールダンスだ。

「やりやあでできるじゃねえか！ ムチケツにチンポ擦りつけてやりてえッ！」

「パイオツも使えッ！ チンポを挟んだら扱くのが牝の仕事だろうがよオ！」

外野の声にソフィアは反応した。両手で乳房を掴み、間にあるウトメキラのペニスを扱いていく。

「わかつてきたなあ！ 涎をもつと垂らせっ！ 亀頭を啜えて吸えっ！ 唇でカリ首を扱けッ！ だらしく実つた乳で竿を擦れえッ！」

「ひゃっ、いッ！ じゅるるるっ！ じゅぼっじゅぼっ！ ぐちゅるるっ！」

王の命令にも素直に従う。生まれてこの方だしたことのない下品な音が、朱唇から迸る。

（みんなのためだとわかつてるけど、こんなことしたくないッ！ なのに、口がとまらない！ 汚い汁を吸っちゃうの、やめられないッ！）

息を継ぐことも忘れて奉仕に熱中するソフィア。もはや躰中、ウトメキラの体液まみれ、己の汗まみれだ。パワードスーツの中の股間からは、本人は気づいていないが女蜜が溢れだしていた。染みが徐々に広がっていき、あと少しで地面に雫が落ちそうだ。

（イッてイッてイッてえ……！ でないと私ッ、本当にッ——）

御座市

国内有数の  
人口が行き交う  
大都市

この街の  
日常に溶け込んだ  
知覚する事の  
出来ない

おいこの資料  
頼んだの  
誰だったっけ？

闇の怪物  
エクリップス達の  
脅威と

なあこの席って  
誰か女の子  
居なかったっけ？

そんな娘  
居たかな？

たった一人で  
戦い続ける  
正義の少女が居た……

その名は

光翼天使  
ユミエル!!

羽連悠美

原作小説、PCゲームも人気のユミエルが連載漫画で再光臨!!!

# 聖天使ユミエル

カオティックロンド

第1話 闇の胎動

漫画  
COMIC

うし 白う~凪い

原作  
ORIGINAL

くろいひろき 黒井弘騎



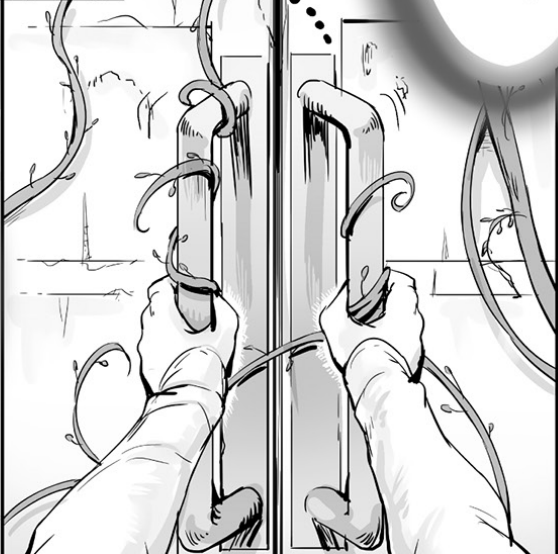
この廃病院ね  
エクリプスに  
捕われた人達が  
居るのは…

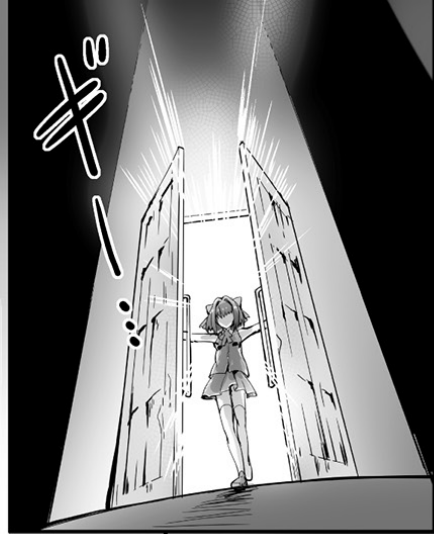
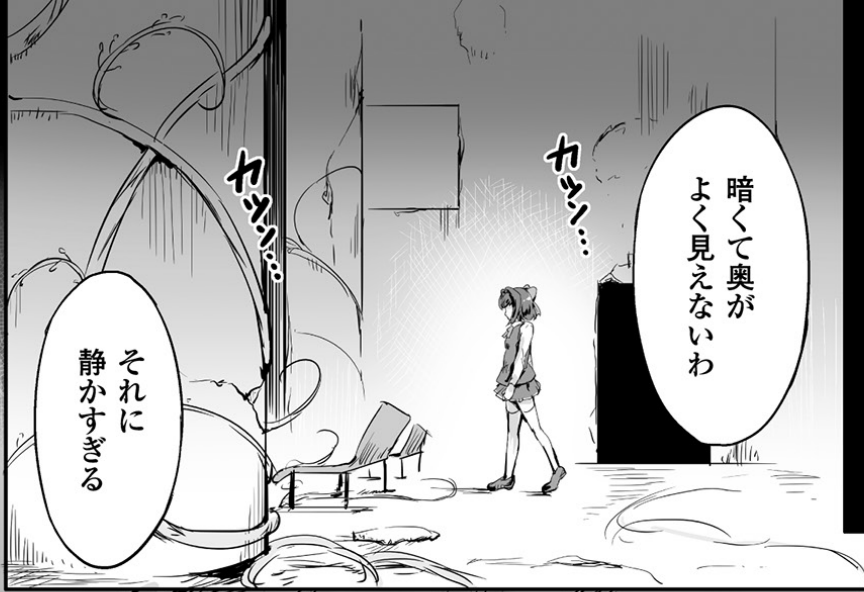


見守ってる  
恵理子…

ガッ…

キョウママ!!







しまった

キヤツ!?

ドサッ

油断したっ!!

くっ



やっ...

めっ...

ギッ

ッ



私が当病院の  
院長を務める  
永津という

とはいっても  
職員は私一人しか  
居ないがね



当病院へようこそ  
院内ではお静かに  
願うよ



あなたが  
街の人達を連れ去った  
エクリプスね!

今すぐ皆を  
解放しなさい!!



羽連悠美君

え…



私の  
患者の迷惑になる  
やめてもらえるかな  
光翼天使ユミエル…  
いや



くくっ…もはや  
君は囚われの蝶だ

私に食される悦楽に  
早く身を委ねたまえ!



どうして私の  
正体を知って!?



超昂神騎

BEAT WALKYRIE XBEAL

# エグジビット

~ 双翼、魔悦調教 ~

第四話 希望と絶望



肉欲の深みに墮ちる神騎たち!!  
その行き着く先は——

小説  
NOVEL

みねさきりゅうのすけ  
峰崎龍之介

そんようしゅう  
挿絵 孫陽州  
ILLUSTRATION

原作  
ORIGINAL

アリスソフト

「起きなさい、エクシール」

その呼びかけに、エクシールは応えなかった。というよりも、いまのままで気絶していたので、返事などできようはずもなかったのだが。

——フレンンジエロ城が最奥、王座の間にて行われているエクシールへの陵辱は、丸一日経ったいまも継続中だった。魔術で自らをふたなり化させたアゼルは、その巨根で以って延々とエクシールを苛んでいる。

といつても、四六時中犯され続けているわけではない。現にいま現在、犬のような四つん這いで蹲っているエクシールの雌穴には、アゼルの肉棒は突き刺さっていなかった。墮天使の王たる褐色の嗜虐者は、気紛れにエクシールを犯しては小休止を取り、また興が乗れば犯すということを繰り返しており、いまはちょうど、その小休止の時間だった。

「起きなさい、エクシール」

「あ……うう……」

再びの呼びかけに、蒼の神騎は掠れた声を漏らした。絶頂と失禁、そして気絶を何度も味わった体と意識は、そう簡単に目覚めてはくれない。

「ふふ……あれだけ犯されれば無理もない、か。いわ。気つけが必要なら、それなりのものを叩き込んであげる……」

こつ、こつ……。静かな足音が聞こえて、止んだ。そしてその次の瞬間には、無防備に晒されたエクシールの雌穴に、激しく勃起した巨根が突き入れられる。気つけというには強烈にすぎる、後背位での強制挿入だ。

「ああうっ?! う、ああ……くあああああつ!」

一息に最奥まで貫かれた衝撃と、それによって弾けた爆発的な快感に、エクシールは絶叫した。

「おはようエクシール。よく眠れたかしら?」  
ぐりぐりと子宮口近くの淫壁を嬲りながら、アゼル

ルは上機嫌に囁いた。が、エクシールは今度も、ともに返答することはできなかった。意識こそ覚醒したものの、起き抜けに叩き込まれた官能が痛烈すぎて、舌が上手く回らないのだ。

「ああ、いいわ……あなたの腔内、何度味わっても飽きない……」

「う……勝手なことを言わないでっ」

「あら、思ったより元気ね。ならその元気な顔を、あの粉い物にも見せてあげなさい」

「え?」

言われて、ふと顔を上げる。するとそこには、見事に実った褐色の乳房を支えるようにして腕組みしているシエムールと、その背中に隠れている小さな人影が見えた。

「ほら、隠れていないで顔を見せなさい。せつかくの……『感動のご対面』なのだから」

シエムールはくすりと笑い、すつと場所を譲った。

「——ッ! キリエル!」

エクシールは思わず叫んだ。燃えるような赤い髪宝石のように美しいオレンジ色の瞳。短刀を思わせる引き締まった体躯——そこにいるのは、紅の神騎キリエルに相違なかった。

(よかった、無事だったんですね……!)

安否不明のままだった仲間をこの目で確認できたことに、エクシールは心の底から安堵した。が、その顔はすぐに曇ることになる。

混乱したままの観察だったので、数秒もの間気づかないでいたが——キリエルの姿は、エクシールが知るものとは趣を異にしていた。鮮やかだった赤の戦装束は邪なる黒に染まり、しかも乳房や股間を露出させた淫らな意匠に変貌していた。

それはどこか見覚えのある姿だった。かつて戦った嫉妬の魔将ジュラウスに精神を乗っ取られ、一時的に『墮天』してしまっただけの姿と瓜二つだった。

「キリエル……」

「ごめん……ごめんね、エクシール。私……自分で思っているほど、強くはなかった……」

どこか虚ろな瞳を見つめて名を呼ぶと、キリエルは唇を噛み、視線を逸らした。それから、何度も「ごめん」と呟き続ける。

「……っ。シエムール! あなた、キリエルになにをしたのですか!？」

シエムールを睨み上げ、叫ぶ。キリエルとの付き合いは短いが大いもので、命懸けの戦いを共に潜り抜けてきた仲だ。その意志の強さが並大抵のものではないということは重々承知している。その彼女が『墮天』してしまうほどの仕打ちを想像すると、それを施したシエムールへの怒りは禁じえない。

「ふふ……さあ、なにをしたのかしらね? ご想像にお任せするわ。……それより、あなたは自分の心配をした方がいいのではなくて?」

エクシールの方がいいのではなくて?」

エクシールはそ場に跪いた。

「進言いたします。エクシールの調教に、私もお加えくださいませ」

「……ほう。主の獲物を横取りすると、そう言うのか。随分と偉くなったものだ、シエムール」

怒りの忠告というよりは、からかうような調子でアゼルが言う。すると、

「まさか」

褐色の女狐はくすりと微笑んでみせてから立ち上がり、エクシールの背後——アゼルの傍に歩み寄っていく。

(……? これは……耳打ち?)

どうやらシエムールが、アゼルになにかを吹き込んでいたようだった。しかし内容までは聞こえず、エクシールは言い知れぬ不安を覚えた。

そして、しばしして——

「——ふん。他人を隔れる手管に関してだけは、私もお前には及ばんな。よからう。お前のプランに従ってやる」

アゼルはそう言うと、挿入を解いてエクシールの体を抱き起し、玉座まで運んだ。そして自身がまず玉座に座り、その腿の上にエクシールを乗せる。つまり最初にエクシールを揃えていたのと同じ体勢に持ち込んだのだ。

「後悔は長くしなさい。私に犯されている間に墮ちておけばよかつたとね」

嘸きとともに、褐色の腕がするりと伸び、エクシールの股間に向かった。そのまま肥大化したクリトリスを、根元からきゅつと摘ままれる。

「……っ」

また肉芽責めか。そう思つて身を強張らせる。が、アゼルは指を動かさず、代わりになにか呪文のようなものを咬いていた。

(これは——魔術!?)

察した時にはもう遅かった。アゼルの魔術は既に発動していて、エクシールの肉体にある変化をもたらし始めていた。

どくん、どくん。心臓が刻む鼓動のリズムに合わせ、股間全体が熱い疼きを発する。クリトリスを肥大化させられた時と似た、耐えがたい衝動だった。

「うっ……うあ、ああああああああっ！」

なにかが張り詰めていく。言語に絶する感覚が、股間全てを覆いつくしていく。そしてその緊張感が、いよいよピークに達した瞬間——

「あ、あ、あ……！くああああああんっ!?!」

ずちゅ、ずるるっ！まるでクリトリスを引き抜かれたような感覚を得て、エクシールは絶叫した。

「あぐ、うああああっ！出る……体から、なにか、引きずり出されて……ッ!?!」

おぞましい感覚から逃れようとする本能で固く目

を閉ざしてしまいがら、エクシールは呻いた。

己の体になにか変化が起きていることは、下半身に残留する不可思議な緊張感が雄弁に物語っていた。しかしその結果を直視するのがどうにも恐ろしくて、彼女は目を開けないまま肩を震わせた。

「目を開けなさい、エクシール。……ふふ、中々の仕上がりになってきているわよ？」

そう嘸きかけてきたのは、アゼルではなくシエムールだった。エクシールはごくりと生唾を飲みつつ、恐る恐る顔を押し上げた。

「あ、ああ……こんな、ことが……」

ぞつとして、呻く。見下ろした先には、それはそれは立派な男性器がそそり立っていたのだ。先ほどから感じていた不可思議な緊張感の正体は、これが激しく勃起している感覚だったというわけだ。

正直なところ、その結果は予想できたものではあった。なにせアゼル自身が魔術によつてふたなり化しているのだ。他人に施すことも可能だろうというのは想像に難くない。しかし実際に自らの股間から男性器が生えている様を目の当たりにすると、想像以上の衝撃があった。

(なんてこと……私のおそこに……こんな大きなモノが……)

エクシールの股間にそそり立つ肉棒は、彼女の可憐な容姿とは裏腹に凶悪な面相をしていた。赤黒い竿には幾本の太い筋が走り、先端では膨れ上がった亀頭が鋭角なカリを作り出している。

「見た目は満点と言つてもいいほどね。あとは『機能』が正常かどうか確かめないと」

シエムールは嗜虐的な笑みを浮かべると、傍らに立つキリエルの背中をそつと押した。そしてその耳元で、こう嘸く。

「エクシールの雌肉棒を慰めなさい。エイダムにしていたように、誠心誠意奉仕するのよ？」

「……」

キリエルはその命令に、躊躇うような素振りを見せた。だが——

「あら……まだ調教が足りていないのかしら？」

シエムールが意地の悪い口調でそう言うと、彼女はぶるりと肩を震わせた。

「わ、わかりました……やりませう」

頷くキリエルの姿からは、普段の気丈な雰囲気は感じられなかった。信じたくはないが、彼女は既に心を折られてしまっているのだろう。

「ごめんね、エクシール。なるべく優しくするから……」

静々とエクシールの前に屈み込んだキリエルは、オレンジ色の瞳に申し訳なさそうな翳りを過らせつつ、そそり立つ肉棒にそつと触れた。

「あ、う……だ、ダメです、キリエル……女同士で、こんなこと……!」

小さく細いキリエルの指が絡みついてくると、エクシールのふたなりペニス早速甘い疼きに苛まれた。

「……ん、匂いはないけど……太くて熱くて……凄く、固い……」

ゆつくりと竿を扱きながら、キリエルが嘸く。その声はどこか艶っぽく、有り体に言うならいやらしい響きを持っていた。本人は無自覚なのかもしれないが、『墮天』した影響が出ているだろう。

やがてキリエルはその可憐な唇で亀頭に「挨拶」をして、しかる後に先端をぱくりと咥えてきた。

「あつ……う、うあ……はあああ……」

たちまち襲ってきた柔らかな官能に、エクシールはうつとりと吐息した。キリエルの口内は熱く、たつぷりと唾液を含んでいて非情に淫猥な感触だった。

(こ、これが……男の快感……!?)

熱い舌が亀頭を這い回ると、蕩けるような快楽が





巫女だ！  
巫女を呼べえ！

やはり剣は  
通じない…！

そびえ立つ淫欲の化身の前に  
巫女たちは



おおおおアアア！

お前たちも  
淫欲の越くままに  
生きよ



# 淫欲の悪魔

Susful Devil

漫画 とけーうさぎ



お前たちも  
淫欲の越くままに…

きやあああ！

汚らしい！  
正気を失ったか！

私たちに瘴気は  
通じません！



ひああ...  
なんだこれは...っ!

きやああああ!

ほう...

じじ...

そんなところ  
な...撫でないでえ

わ...私たちは  
穢れなき巫女...こ...こんなもの...  
おあああああ...!

い...い...  
いやあああ...

生娘とはいえ快楽を  
求め食りたいという  
性には逆らえぬ  
それがお前たちの本能よ

ロマン...ですわ

われの魔手は  
ヒトの本能を  
呼び起こす  
さあ何がしたい  
今なおおれを  
倒すと申すか?

こんな...こんなはず...  
ああああ...あああ

どうして...  
これ...あんっ  
いやあっ

チカラが抜け...

わあ...  
わあ...

此の者アイオラに  
神のご加護を…

キヤン

だ…大丈夫かね…

悪魔には  
剣も砲も通じぬ

神の加護を受けた  
巫女の力に  
頼るほかない…

それだけでは  
あの悪魔は倒せないわ

…もうこの国には  
生娘がおらぬ…  
お前だけが頼りじゃ

悪魔の魔手に気をつける…  
あれにカラダを  
撫でられた途端みな…

安心して下さい

私感じませんから

む…

ア…



また人間か

巫女のアイオラと申す  
覚悟しろ悪魔め

わがが直接  
抱いてやろう

キモチよく  
なろうぞ

おい  
少しも気持ちよくないぞ  
真面目にやれ

.....

カッパッパ

カッパ

カッパ

カッパ

カッパ

カッパッパ

カッパ

カッパ

ぬ.....





私に性感帯はない

そんなものが  
効くか  
たわけめ

バカな  
われの魔手は…

感じないな

安心しろよ  
ちゃんとお前には  
快楽をくれてやるから

処女は処女でも  
何も知らない女なんて  
役に立つわけがない

どうした  
キモチいいのが  
好きなんだろう

性技もなく男根に  
立ち向かうなんて  
槍を持たずに騎兵に  
挑むようなもの

こ…この女の手は…ッ  
グウウッ…ッ

聖のチカラを  
注がれながら  
刺激される  
気分はどうだ

魔手とやらの動きが  
止まっているぞ

ンンオオ…

スゴウッ

スゴウッ

ホトオオ

はははは

クハクハ

クハ

クハ

クハ



悪落ち完全屈服!?

果たして装刃戦姫たちの未来は……。



装刃戦姫

# サクラビト

フタナリ淫獄に墮ちる黒髪乙女

最終回 闇に沈む装刃戦姫 墮淫と恍惚の未来

小説 **有機企画** 挿絵 **みどりぎむら 緑木邑**

「装刃戦姫は快楽に墮ち、残すは神鬼、羅轟丸を復活させる儀式のみ。」

「大勢のオニグミが見守る中、最後のフタナリ調教が始まるうとしていた。」

「それにしても、あの坊やを生かしておく意味はあるのかい？ 用は済んだんだから喰っちまえばいいのにさ」

「手に入れたコレクションも見せびらかす相手がないとつまらないですから。彼には最後まで見届けてもらいますよ」

「まったく、いい趣味してるよ」

「良平を元の身体に戻すための術を施した妖月は、やれやれといった様子で肩をすくめた。」

「さてと、陣も完成したようだし、さっそく始めようか」

「舞台には歪んだ五世星を囲むように円を描いた、『降魔の陣』があった。」

「陣の中で装刃戦姫が精液と共に吐き出した霊力を使い、羅轟丸を復活させる仕組みである。」

「あなたたち準備はいいかい？」

「ああ、もちろんだ」

「なんなりと命令してくださいませ」

「ダブル戦姫は悪鬼に恭順し、蕩けた笑みを浮かべる。」

「股間の肉茎は巨大化したままで、まだまだ尽きることなく射精できそうである。」

「わたしからいきますわね」  
「陣の中心に進み出るコーデリア。」

「返還された神器結晶を舌で舐めると、改めて転身する。言葉に応え、濁ったサファイアブルーの光が放たれた。」

「淫欲を体現するように、これまでとは違うコスチュームがプロンド戦姫の肢体を包む。」

「人に仇なす悪魔のみなさん」  
「いっばいっばい」

「ご奉仕しますわね」  
「お口マンコでおチンポ舐めてえ」  
「淫乱チンポでマゾ射精」  
「雌ブタ戦姫コーデリア、ここに見参ですわ」

「サキユバスのように微笑み、下品で淫靡なセリフを決めるコーデリア。」

「頭の兜はそのままに、V字のスリングショット水着が魅惑のボディラインを彩る。」

「収まりきらないEカップ美乳と巨玉フタナリチンポがいやらしく弾んだ。」

「数多の悪魔を葬ってきた凛々しく自信家の彼女はもうどこにもいない。」

「一生ペットとして生きていく覚悟はいいかい？ これからはあたしの命令に絶対服従だよ」

「妖月さまのためならなんでもしますわ」  
「戦闘でも実験台でも夜のお伴でも好きに使ってくださいませ」  
「淫乱マゾペットとして躑けてくださいな」

「なら手始めに椅子になつてもらおうか。そこにしやがんでござらんよ」

「椅子……ですの？ 一体どうやって……んっ！ むううううううう」

「困惑しつつもしやがむコーデリアの顔面に妖月の股間が覆いかぶさった。」

「着物をたくし上げ、紫のショーツをびつたりと唇に密着させる。」

「麝香に似た香りが鼻腔をくすぐった。」

「ひうっ♡ アンツ♡ 椅子になるってこういうことですね♡ ふあ……ああああ♡」

「うっとりしてるんじやないよ。しつかり支えな」

「妖月さまの下着を直接嗅げるなんて光栄すぎますわ♡ 香りだけでもおチンポがピンピンになってしまします♡ はあ……ふああああ♡」

「犬のように肉竿を振り、鈴口を濡らす。屈辱的な仕打ちをされているのに、興奮が収まらない。」

「ザーメンを出す前に謝罪の意味も込めてクンニでもしてもらおうか。しつかり奉仕しな」

「はい♡ オマンコ舐めさせてもらいますわ♡ ……ん♡ ちゅう……んうう……♡」

「クロッチの横をズラすとペロを挿し込み、丹念に窟孔を舐め回す。」

「甘ったるい水音が欲情を煽る。」

「ちゅく、ちゅううぶ♡ あぶ♡ オマンコ美味しくてたまりませんわ♡ はあはあああああ♡」

「中々上手いじやないか。毎日使うことも検討しておこうかね」

「お褒めに与り光栄ですわ♡ オナニーくらいしか取柄のないマゾ戦姫ですが、誠心誠意オマンコペロペロさせて頂きますの♡ ちゅ♡ はむちゅうううう♡ くん♡ くん♡ くん♡ くん♡ くん♡」

「おやおや、尻の匂いまで嗅いでいるのかい。ま、好きにするといさ」

「ふおおおお♡ アナルに鼻を埋めてクンクンクンクン♡ かぐわしくてやめられません♡ 香りが素敵すぎますのおおお♡ フゴ♡ フゴおおおお♡」

「豚のように鼻を鳴らし肉感たつぷりのお尻に魅惑される。」

「奉仕する喜びに乳首もピン勃ちだ。」

「まだまだこんなものじゃ済まさないよ。次はオマンコにコイツをぶち込みな」

「四本の尻尾が一塊になると極太の肉パイプへと変化した。」

「充血した亀頭やカウパーの先走りなど、本物よりも雄々しい雄凶器がコーデリアの鼻先に近づけられる。」

「あたしのペットに処女はいらないんだよ。ついでに捨てちまいな」

「は、はい♡ 妖月さまの尻尾勃起でハメハメしま

「は、はい♡ 妖月さまの尻尾勃起でハメハメしま

## 登場人物紹介



### 建宮流華

「装刃戦姫サクラヒメ」に転身し、人に仇なすオニグミを滅殺する。

### 鬼蛙

オニグミを束ねる幹部。蛙坂蔵夫という名で流華と同じ学園に通い、彼女を徹底調教する。

### クリス

流華の親友で「装刃戦姫コーデリア」に転身する。本名はクリスティーナ・エイミス。

### 妖月

クリスに恨みを持つオニグミの幹部。

### 前号までのあらすじ

人に仇なすオニグミと戦う装刃戦姫サクラヒメこと流華は鬼蛙に敗北し、地獄のようなフタナリ調教を強いられる。そして、装刃戦姫コーデリアとして戦う流華の親友、クリスにも妖月によるフタナリ調教の魔の手が迫り……。

「あつ、あああああ！ どんどん入っていきませぬ♥ もう少しで奥までえ……♥」

恐れを振り払い、薔薇の秘奥を穿つお嬢さま戦姫。薄い膜に亀頭が触れ、激しい衝撃と共に処女膜が引き裂かれた。

プチ、ズチチ、ズチチチイイイイイッ！

「いまますわね。ん……あつ、ああ、ン、ンぐううううううううううッ!!」

亀頭を腔孔にあてがうと力を込め一息に挿入する。熱い男根がピンク色の柔肉をかき分けていく。

「あつ、あああああ！ どんどん入っていきませぬ♥ もう少しで奥までえ……♥」

射精絶頂のためならどれほど惨めな思いをしようとかまわぬ。

「いまますわね。ん……あつ、ああ、ン、ンぐううううううううううッ!!」

亀頭を腔孔にあてがうと力を込め一息に挿入する。熱い男根がピンク色の柔肉をかき分けていく。

「さして頂きますわ♥」

抵抗する気力などあるはずもない。被虐快感への期待を胸にコーデリアは肉パイプへ手を伸ばす。

「ついにバーজনを卒業しますのね。初めては好きな殿方に捧げたかったのですけど……いえ、それよりおチンポですわ♥ 生ハメしながら射精なんてどれほど気持ちいいのでしょうか♥」

宿敵相手に純潔を散らすことよりも、フタナリ快美への期待が思考を支配する。

射精絶頂のためならどれほど惨めな思いをしようとかまわぬ。

「いまますわね。ん……あつ、ああ、ン、ンぐううううううううううッ!!」

亀頭を腔孔にあてがうと力を込め一息に挿入する。熱い男根がピンク色の柔肉をかき分けていく。

「ア、あひぐウウウウウウウッ♥ きてます♥ 雌穴にすごいのがきてますの♥ 痛いのにぎもぢイイッ♥」

「あは、アハハハハ！ よかつたねえ処女卒業できて。相手は男どころか人間ですらないけど!」

「おぢ♥ ばんぐうううう♥ そんなのどうでもいいですわ♥ マンコキできるなら本物のおチンポでなくてもオッケーですの♥ ふづ♥ アフウウウウッ♥」

鮮血で太腿を染めながら嬌声を上げる。

破瓜の喪失感よりも腹の底から湧き上がってくる悦楽が思考を塗りつぶしていく。

「マンズリ♥ マンズリ♥ マンズリ最高ですわ♥へお♥ おお♥ ふほおおおおおおおおお♥ すごいのがどんどん昇ってきますのおおおおおおおお」

「初体験とは思えない乱れっぷりだねえ。おまけにチンポまでフル勃起じゃないか」

「マゾ快感が伝播しますの♥ お股をヒリヒリさせながら乱暴に擦るの素敵すぎますわ♥ 辛くてみつもなくて、変態勃起がいつもより喜んでしましますの♥ あへ♥ ヘエエエエエエエエエ」

股間から愛液を垂れ流し、フタナリ肉幹をおつ勃て快美に酔いしれる。

パイプに蜜糸を引かせながら腹筋を脈動させ、初々しい肉ヒダを波打たせる。

「股の下で大きな声を出しちやつてまあ。女としての慎みつてものはないのかい?」

「そんなものあるわけありませんわ♥ パイプピストンがあれば他に何もありませんの♥ ほお♥ おお♥ ほおおおおおおおお♥」

「やれやれ、これじゃエイミス家の名も泣くだろうねえ。つと、クンニも忘れるんじゃないよ」

「ひいひい♥ オマンコ舐めながらオマンコ弄ります♥ じゅぶ♥ ちゅううぶ♥ んぶつ、ちゅ

「お股をヒリヒリさせながら乱暴に擦るの素敵すぎますわ♥ 辛くてみつもなくて、変態勃起がいつもより喜んでしましますの♥ あへ♥ ヘエエエエエエエエエ」

股間から愛液を垂れ流し、フタナリ肉幹をおつ勃て快美に酔いしれる。

パイプに蜜糸を引かせながら腹筋を脈動させ、初々しい肉ヒダを波打たせる。

「股の下で大きな声を出しちやつてまあ。女としての慎みつてものはないのかい?」

「そんなものあるわけありませんわ♥ パイプピストンがあれば他に何もありませんの♥ ほお♥ おお♥ ほおおおおおおおお♥」

「やれやれ、これじゃエイミス家の名も泣くだろうねえ。つと、クンニも忘れるんじゃないよ」

「ひいひい♥ オマンコ舐めながらオマンコ弄ります♥ じゅぶ♥ ちゅううぶ♥ んぶつ、ちゅ

「お股をヒリヒリさせながら乱暴に擦るの素敵すぎますわ♥ 辛くてみつもなくて、変態勃起がいつもより喜んでしましますの♥ あへ♥ ヘエエエエエエエエエ」

股間から愛液を垂れ流し、フタナリ肉幹をおつ勃て快美に酔いしれる。

パイプに蜜糸を引かせながら腹筋を脈動させ、初々しい肉ヒダを波打たせる。

「股の下で大きな声を出しちやつてまあ。女としての慎みつてものはないのかい?」

「そんなものあるわけありませんわ♥ パイプピストンがあれば他に何もありませんの♥ ほお♥ おお♥ ほおおおおおおおお♥」

「やれやれ、これじゃエイミス家の名も泣くだろうねえ。つと、クンニも忘れるんじゃないよ」

「ひいひい♥ オマンコ舐めながらオマンコ弄ります♥ じゅぶ♥ ちゅううぶ♥ んぶつ、ちゅ

「お股をヒリヒリさせながら乱暴に擦るの素敵すぎますわ♥ 辛くてみつもなくて、変態勃起がいつもより喜んでしましますの♥ あへ♥ ヘエエエエエエエエエ」

股間から愛液を垂れ流し、フタナリ肉幹をおつ勃て快美に酔いしれる。

パイプに蜜糸を引かせながら腹筋を脈動させ、初々しい肉ヒダを波打たせる。

「股の下で大きな声を出しちやつてまあ。女としての慎みつてものはないのかい?」

「そんなものあるわけありませんわ♥ パイプピストンがあれば他に何もありませんの♥ ほお♥ おお♥ ほおおおおおおおお♥」

「やれやれ、これじゃエイミス家の名も泣くだろうねえ。つと、クンニも忘れるんじゃないよ」

「ひいひい♥ オマンコ舐めながらオマンコ弄ります♥ じゅぶ♥ ちゅううぶ♥ んぶつ、ちゅ

「お股をヒリヒリさせながら乱暴に擦るの素敵すぎますわ♥ 辛くてみつもなくて、変態勃起がいつもより喜んでしましますの♥ あへ♥ ヘエエエエエエエエエ」

股間から愛液を垂れ流し、フタナリ肉幹をおつ勃て快美に酔いしれる。

パイプに蜜糸を引かせながら腹筋を脈動させ、初々しい肉ヒダを波打たせる。

「股の下で大きな声を出しちやつてまあ。女としての慎みつてものはないのかい?」

「そんなものあるわけありませんわ♥ パイプピストンがあれば他に何もありませんの♥ ほお♥ おお♥ ほおおおおおおおお♥」

「やれやれ、これじゃエイミス家の名も泣くだろうねえ。つと、クンニも忘れるんじゃないよ」

「ひいひい♥ オマンコ舐めながらオマンコ弄ります♥ じゅぶ♥ ちゅううぶ♥ んぶつ、ちゅ

「お股をヒリヒリさせながら乱暴に擦るの素敵すぎますわ♥ 辛くてみつもなくて、変態勃起がいつもより喜んでしましますの♥ あへ♥ ヘエエエエエエエエエ」

股間から愛液を垂れ流し、フタナリ肉幹をおつ勃て快美に酔いしれる。

パイプに蜜糸を引かせながら腹筋を脈動させ、初々しい肉ヒダを波打たせる。

「股の下で大きな声を出しちやつてまあ。女としての慎みつてものはないのかい?」

「そんなものあるわけありませんわ♥ パイプピストンがあれば他に何もありませんの♥ ほお♥ おお♥ ほおおおおおおおお♥」

「やれやれ、これじゃエイミス家の名も泣くだろうねえ。つと、クンニも忘れるんじゃないよ」

「ひいひい♥ オマンコ舐めながらオマンコ弄ります♥ じゅぶ♥ ちゅううぶ♥ んぶつ、ちゅ

「お股をヒリヒリさせながら乱暴に擦るの素敵すぎますわ♥ 辛くてみつもなくて、変態勃起がいつもより喜んでしましますの♥ あへ♥ ヘエエエエエエエエエ」

股間から愛液を垂れ流し、フタナリ肉幹をおつ勃て快美に酔いしれる。

パイプに蜜糸を引かせながら腹筋を脈動させ、初々しい肉ヒダを波打たせる。

「股の下で大きな声を出しちやつてまあ。女としての慎みつてものはないのかい?」

「そんなものあるわけありませんわ♥ パイプピストンがあれば他に何もありませんの♥ ほお♥ おお♥ ほおおおおおおおお♥」

「やれやれ、これじゃエイミス家の名も泣くだろうねえ。つと、クンニも忘れるんじゃないよ」

「ひいひい♥ オマンコ舐めながらオマンコ弄ります♥ じゅぶ♥ ちゅううぶ♥ んぶつ、ちゅ

「お股をヒリヒリさせながら乱暴に擦るの素敵すぎますわ♥ 辛くてみつもなくて、変態勃起がいつもより喜んでしましますの♥ あへ♥ ヘエエエエエエエエエ」

股間から愛液を垂れ流し、フタナリ肉幹をおつ勃て快美に酔いしれる。

パイプに蜜糸を引かせながら腹筋を脈動させ、初々しい肉ヒダを波打たせる。

「股の下で大きな声を出しちやつてまあ。女としての慎みつてものはないのかい?」

「そんなものあるわけありませんわ♥ パイプピストンがあれば他に何もありませんの♥ ほお♥ おお♥ ほおおおおおおおお♥」

「やれやれ、これじゃエイミス家の名も泣くだろうねえ。つと、クンニも忘れるんじゃないよ」

「ひいひい♥ オマンコ舐めながらオマンコ弄ります♥ じゅぶ♥ ちゅううぶ♥ んぶつ、ちゅ

「ちゅぶ……あむ、んぶ！ ま、待つてください！ わたくしまだ下にいて……あうっ♥ あ、あんううううう♥」

「ん？ あんたはマンズリの最中なんだろう？ 気にせず気持ち良くなりなよ」

「あきゆうううう♥ あひ……パイプ動かさないでえ！ 大事な部分に当たってますのお！ お♥もごおおおおお♥」

肉パイプが蠢き膣奥をゴリゴリと掘削する。強烈な悦楽に雌声を上げ、フル勃起ベニスまで前後させる薔薇の戦姫。

汚辱の恐怖と期待に肢体をわななかせる。

「妖月さまそれだけは許してください！ 観客の方々にも見られますから！ うぐ、んぐううウウウウウ！！」

さらに体重がかげられ口を封じられる。妖月の尿道口がヒクヒクと蠢き、尿意が膨れ上がっていく。そして、黄金色の液体がコーデリアの口に向かって流し込まれた。

ジョロ♥ ジョロロロロ♥ ジョババ〜ッ♥

「ンぐ……むつぐううううう！ オシッコが入ってきて……うぶ、ほごおおおおおお！」

「おつとこれじゃ椅子じゃなくて便器かねえ。どっちでもいいけどさ」

「ぶぶ！ ぶぶぶ！ 臭いしょっぱい……はぶ、ブウウウウウウウウッ！」

「一滴残さず飲み干すんだよ。こぼしたらまた罰を与えるからね」

「ふぐ……ぐく、ゴクン♥ ゴクッゴクン♥」

喉を鳴らし生暖かい液体を胃に流していく。常人なら発狂してしまいそうなシチュエーションも、マゾヒロインには極上の快楽だ。

倒錯的な幸福感がフタナリ肉竿に血液をポンプし、鈴口にカウパーの泡が浮かぶ。

「ひいひいひいひい♥ 便器♥ 便器扱い最高です♥ オシッコまみれなのにおチンポが興奮してたまりません♥ うぶ、ゴブ♥ もおおおおおおおおおおおお♥」

「精液を捧げなコーデリア。羅蠱丸さまのためにね」

「ひやひや妖月しゃまあ♥ もゴツ♥ ぶほおッ♥ ザーメンくる♥ ザーメンきますわ♥ 射精管どんどん昇ってきてますのお♥ へお♥ おへおおおおおおお〜ッ♥」

パイプの抽送速度が上がり、はしたない水音がさらに大きくなる。

フタナリ肉竿に血管が浮かび上がり、背筋がビクンと跳ねる。

鈴口がパクパクと口を開き、怒涛の勢いで雄の白濁が迸った。

ブビュ♥ ビュリユリユリ♥ ドバ♥ ドババ♥ ドビュババアアア〜ッ♥

「くふ、おおっ！ ンほおおおおおお〜ッ♥ イグ♥ イグ♥ オマンコイキながらおチンポイグう♥ 濃いマゾザーメンがどびどびでてますのおおおおおお♥ オシッコ飲みながら便器になりながら最低の無様イキチンポ♥ ミルクサーバーみたいなザーメンお漏らし止まりません♥ ま、またイグ♥ イグう♥ 射精終わりませんわ♥ あへ、アへえええええええ〜ん♥」

雌奴隷として儀式に貢献し、美貌を蕩かせる装刃戦姫コーデリア。

完全にペットとして馴けられ、その瞳にかつての煌めきはない。

降魔の陣が淡く発光し、ザーメンを吸収した。

「おチンポしゅごい♥ しよごすぎますのお♥ げふ♥ ケプ♥ ゲェ〜プ♥」

白目を剥きオシッコ臭いゲップをする。

薔薇のお嬢さま戦姫はどこまでも続く快美の深淵

に堕ちていった。

「いい見世物だったよ。次はボクたちの番だね」

「ああ、楽しみだな♥」

入れ替わるようにサクラヒメと鬼蛙が降魔の陣へ進み出た。

「神器転身♥」

胸元から神器結晶を取り出し言霊を込める。直後、紅黒い閃光が四方八方に放たれた。

セーラー服を分解して出現したのは、淫らな改造を施されたウエディングドレスだ。

流れるような黒髪には純白のブーケ、丸出しのGカップ巨乳はビスチェで強調され、シルクのガーターベルトとストッキングが下半身を彩る。

羞恥花嫁衣装を纏った黒髪乙女は、声高らかに名乗りを上げた。

「人に仇なす悪鬼羅刹よ思う存分笑うがいい♥ 痴態を晒すは神器の刃♥ 変態チンポ勃起させて淫乱マンコでラブラブセックス♥ お嫁さん戦姫サクラヒメここに見〜ん♥」

自らを最低の存在に貶め、それまで良平に向けていた視線とまったく同じものを鬼蛙へ向ける。

両親の仇討ちや装刃戦姫としての使命など、最早どうでもいいといった様子だ。

「鬼蛙、わたしはどんなプレイでもかまわないぞ♥ めちゃくちゃに犯してくれ♥」

「クフフ、キンタマが空っぽになるまで射精させてあげるからね」

「望むところだ♥ 装刃戦姫の矜持に懸けてチンポにご奉仕してやる♥」

鬼蛙はニキビ面を喜びに歪めると、サクラヒメをぐつと抱き寄せた。

愛する人にするように。

「鬼……蛙？」

「この時をずっと待っていたよ」

娛樂場  
楊京

CASINO  
YOHKEI

中華系カシノ楊京

ようけい

やつと麻薬の出所を

突き止めたと思つたら

厄介な出所ね……

やつぱり  
私が潜入するわ！  
杉崎はここで待っていて

いくら先輩でも  
一人ではムチャ  
ですよ!!

高坂先輩!

先輩の実力は  
信じてますけど  
応援が来るまで  
待ちましょう!

……

美脚も露わなセクシーチャイナ  
グラマラス捜査官と触手の戦い

今を逃したら  
また麻薬がはびこる  
絶好の機会を与える  
ことになるわ

それにたまには  
先輩のイイトコ  
見せないかね

高坂先輩!

意地でも証拠は  
押さえとく!

応援が着いたら  
すぐ突入して!

何度も  
煮え湯を飲まされたけど  
今度こそ壊滅させる……!!

# 潜入捜査官 触手悶絶

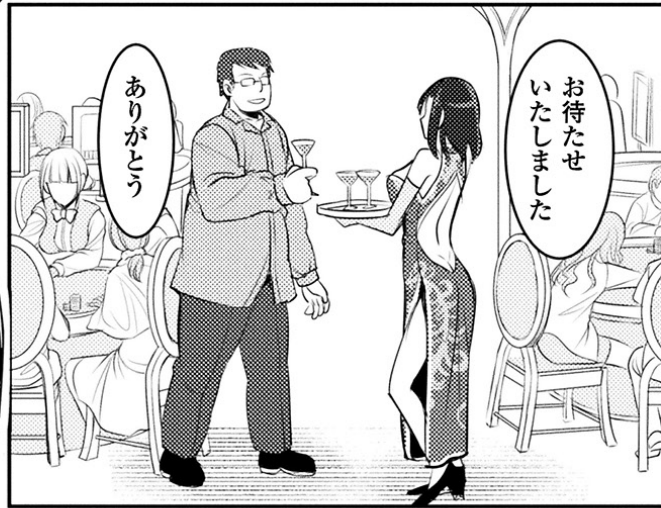
漫画  
COMIC

そんようじゅう  
孫陽州



上手いことホールには  
紛れたけどここじゃ  
証拠なんてあるわけない  
売人くらいはいるかしら？

早いところ目星をつけて  
逃げられる前に  
証拠を押さえなくちゃ…  
やはり従業員エリア…？



バオフンユイ!



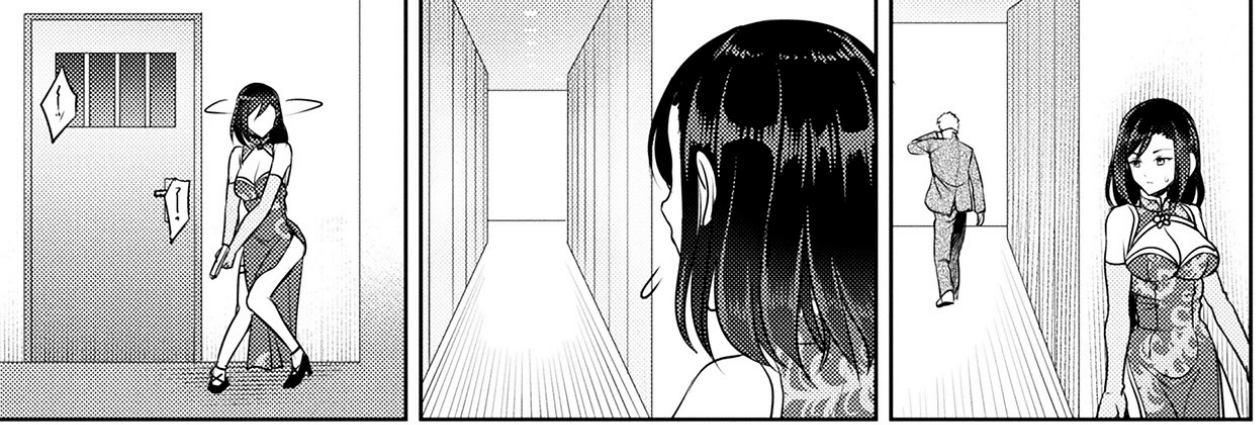
あいつはこの間  
港で取り逃がした…



あいつを追えば  
きっと麻薬の出所が  
わかるはず!









とにかく  
助けないと!



ヒトデとも蛸とも違う...  
何なのあの化け物は...!



いいえ!  
迷ってる  
時間はない



銃は効く!!



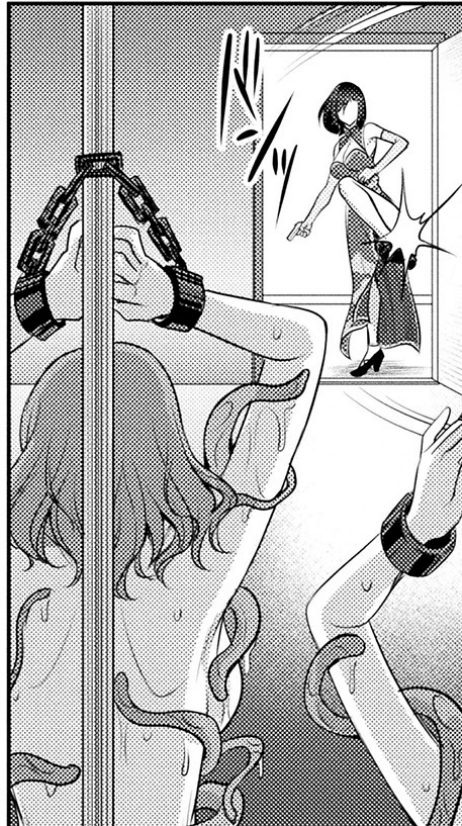
誰もいない  
今じゃないと...!



立って!!

助けるわ!  
立って!

あなたたち!



大丈夫！  
ここから裏口は  
すぐそこよっ

外は  
警察が張っているから  
外にさえ出られれば  
すぐ助けてくれるわ！

ダッ



パンパン



どうする…  
増援も来るだろうし一人で  
相手するのも無理がある…



逃げて！  
早く！



おい！  
女どもがいないぞ！  
探せっつ！！

姦淫乱れる容赦なき戦乱の物語——堂々完結!!



電子ソベルズ第1巻~第2巻  
各電子書籍サイトにて  
好評発売中!



# 魔剣士 リネ2

乙女穢されし戦場

【最終話】明日への一歩

原作/まくらカバーソフト

小説/酒井仁

挿絵/桐島サトシ

「くそつ、なにがどうなっておる!」  
ストームランス公国の騎士団長ラン  
ドルフは、鋭い眼光で魔物を見据えて  
斬りかかる。ぎゃあという叫びとともに  
に、魔物の首が宙を舞う。

「この分では他国もどうなっているこ  
とやら……!」

ぐいと額の汗を拭うランドルフの顔  
に、焦りが浮かぶのも道理。

まったく、なんの前触れもなくダイ  
ヤモンドシテイ周辺に魔物の群れが出  
現し、市内に攻め入ってきたのだ。

騎士団や兵士は直ちに対処、市民の  
避難誘導と魔物迎撃に向かったが、ど  
うしても後手後手に回ってしまう。

いまは魔物の第一波をどうにか撃退  
し、ようやくアウラ神国の神官長ワイ  
ンバーグが他の神官たちと協力し、こ  
の邪悪なマナの根源を探索し始めたた  
ころであった。

「どうですか、ワインバーグどの」

「むう、肌で感じられるほどの邪悪な  
マナの中心は、なんと後宮の近くです  
ぞ! ウォードどの、聖王陛下やリー  
ネさまたちが心配です。ここは我らに  
任せて早く後宮に!」

「心得ました! ランドルフどのもお  
気をつけなされよ!」

だが、さしものワインバーグも、こ  
の異変が聖王バロック——いやパロ  
ックの皮を被った魔王皇子ヘルメスが引  
き起こしたものだとは知る由もない。

まして、ヘルメスが聖王の仮面をか

なぐり捨て、魔王の本性もむき出しに  
人間たちに攻撃を仕掛けてきたなどと、  
誰が気付くというのか。

「くつ! いったいどこからこんなに  
も大量の魔物が……でやあつ!」

ウォードとしてブルデイの領主である  
以前に騎士として腕に覚えのある男。  
しかしウォードもランドルフも、久し  
く前線を離れ政務に携わっていたのが  
裏目に出た。

(まして、アレス將軍を欠いた状況で  
は、一気に押し込まれてはまずい)

ウォードは、アレスがバロックに謀  
反を起こしたなどとは信じていない。  
だがここにいない者を頼りにするほど  
腑抜けてはいない。

「皆の者、続け! 聖王陛下とそのお  
世継ぎの命を死守するのだ……!」

応つ、と力強く答える兵士たちに突  
風が襲いかかる。強化服が裂け、悲鳴  
が上がる。

「これは風系の攻撃魔法……ウ、ウエ  
ンディどの?」

「うふふ……あははは、ははは!」

続けて襲い来る火球は、三つ編みお  
下げの少女が放つたもの。味方である  
はずのヘステシアの魔女たちがウォー  
ドたちに攻撃するのも異常なら、少女  
たちの姿もまた異様。

二人とも衣服を着けていないが、そ  
の手足、局部を隠すように不気味な触  
手が絡みついていたので。

「ブリザード」 「爆弾大炸裂ッ!」

続けて氷結魔法、そして爆薬が破裂

して兵士を吹き飛ばす。

「サブリーナどの、マリオンどのまで?  
皆乱心しておるのか」

なにがどうなっているのかはわから  
ないが、ペアトリスの側近やシンシア  
の従者に攻撃することもできず、ウォ  
ードは立ち往生するしかなかった。

一方その頃——。

セリアから最後の聖武具を受け取つ  
たアレスは、エルヴィン、そして黄金  
の騎士団たちとともにダイヤモンドシ  
テイに戻って来ていた。

「アレス、ボクはペアトリスさまたち  
が心配だから後宮に向かうよ」

「そうしてくれ。ハインリヒさま、急  
ぎ聖稜ホーリーヒルにお向かいくださ  
い。そして真なる聖王となる儀式を」

「うむ」

ハインリヒ……バロックの隠し子で  
ある青年の護衛には、黄金の騎士団が  
付く。聖王の光を浴びた騎士団たちな  
ら、心配ないだろう。

アレスはセリアとともに、まず女騎  
士クロエたちとの合流を図る。セリア  
は狩人だけあって足が速い。大人数で  
動いて目立つよりずっといいという判  
断である。

「アレスさん、急ぎましょう。マルテ  
イナさまたちが心配です」

そう、バロックが命を絶たれたとい  
うこと、そしてこの魔物の群れを見る  
に、いよいよ暗躍していた悪魔が本格  
的に攻勢に出たに違いない。

「もしかして、魔物たちはハイランド  
だけじゃなくて、他の国まで襲ってい  
るんでしょうか」

「ああ、その可能性は大いにある。だ  
がいまはそれを確かめようもない。急  
ぐぞセリア!」

「はいっ」

(他国のことも心配だが、シンシアも  
リーネも身重の身体。それにクロエた  
ちも心配だ)

その時であった。

疾風のような剣撃がアレスを襲った。  
聖剣でそれを受け止めたアレスの顔が、  
驚愕に歪む。

「ク、クロエ……それにマルティナさ  
まにノーラまで、いったいどうしたん  
だその姿は!」

「よく受け止めたわね、アレス」  
深緑の長髪と青い瞳。不敵な眼差し  
がアレスを見据えている。

女騎士にしてバロックの実妹クロエ  
と、ルートヴィッヒの妻マルティナ、  
そしてマーサ公国の偵察武将ノーラが  
短剣をアレスたちに向けている。

しかも彼女たちはヘステシアの魔女  
たちと同様——全裸に触手をまとわ  
せただけの破廉恥な姿を恥じる様子  
もなく、敵意だけをアレスたちに向け  
てくる。

「アレス將軍……あなたとは一度、本  
気で手合わせしたかったの」

ぶうん、と振り抜いた長剣をかわす  
とノーラが短剣片手に飛びかかり、そ  
れを打ちすえようとすると、マルティ

ナが短剣片手に飛びかかり、それを打ちすえようとすると、マルティ

ナが立ちふさがる。

すかさずセリアが牽制の矢を放とうとするが、相手が相手だけに攻撃していいものやら困惑を隠せない。

「どうしたのアレス将軍。本気を出さないとおちのお嬢さん一人守れなくてよ！」

「やめるんだ、クロエ！」

相手がクロエ一人なら、剣を突き飛ばすこともできただろう。しかし相手は三人、ことに剣士でも武将でもないマルティナの動きが読めず、攻めあぐねてしまう。

「みんな正気じゃない……黄金の騎士団たちと同じだ！」

だとすれば、バロックの命を奪った悪魔の仕業か。その悪魔を倒さない限り、彼女たちの洗脳は解けないかもしれない。

「アレスさん、あれを！」

どこから火の手が上がったのか、轟と火柱が王城門から立ち上る。その焔を背に、巨大な人影がアレスたちを見下ろしていた。そのおぞましい姿に、セリアだけでなくアレスまでも言葉を失う。

浅黒い筋肉質の胸に刻まれた奇怪な紋様。下半身は獣の体毛に包まれ、両肩からは巨大な翼がばさりと広がる。湾曲した二本の角、耳元まで裂けた口に光る牙。

そして——そして何よりショッキ

ングなのは、悪魔の股間からよつきりと生えた肉棒に貫かれた可憐な女体

だった。

「リーネ……！」

剣の女王は無残にも強化服を剥ぎ取られていた。乳房は丸見え、その身体をかううじて支えているのは、臍穴を深々と縫いとめた怪物の巨根。

いわばリーネは怪物の男根で串刺しにされたも同然であったのだ。

「う……ア、アレス！」

怪物の身体に束縛された少女が顔を上げ、微かな呻き声を上げる。その声は弱々しいが、リーネの目はクロエたちと違い、まだ正気を保っている。

「リーネ、いま助ける、もう少し我慢してくれ！」

アレスは聖剣を握り直す、その前にクロエたちが立ち足はだかる。人面獣身の悪魔はゲラゲラと嗤笑する。

「くくく、お前は不敗の智将アレスではないのか。そんな女どもなど、容易く蹴散らせるだろう！」

「貴様……何者だ!？」

「これから死にゆくものに我が偉大なる名を伝えても詮無きことだが、教えてやろう。我が名は魔皇子ヘルメス、貴様ら下等な人間どもを滅ぼし、この地上を支配する魔族の王!!」

傲慢な名乗りを上げただけで凄まじい邪気が噴出、聖武具を付けたアレスすら圧倒される。そして直感したこの禍々しい悪魔こそヒッピーアやバロックを陰で操り暗躍していた元凶であることを。

「魔皇子ヘルメス……貴様を倒し、す

べての根源をいまこそ断つ！」

「くくくく……できるかな。いかに聖武具をまとおうと、人間など悪魔の餌に過ぎぬ。お前もあの無能王バロック同様、私の糧となれ！」

バロックの名を耳にした瞬間、アレ

スは矢のようにヘルメスに突進した。いかに好色で怠惰であっても、バロックは聖王であった。聖王殺しの当人に前に、騎士の血が怒りにたぎる。

「うおおおつ！」

がいいいんつ。しかしアレスの剣はクロエに弾かれる。ノーラが、マルティナが両手を広げてアレスの前に立ちふさがり、アレスは後退する。

「みんな、正気に戻ってくれ! くつ、これでは攻撃が届かない！」

しかし全裸に触手をまとった乙女たちの目は尋常ではない。薄笑いさえ浮かべ、自らを盾にしてヘルメスを守ろうとしているのだ。

「うふふ……ふふ、触手がうねうね動いて、おまんこに食い込んだじやうう！」

「おつばい、もつと弄つてえ！」

「み、皆さん……アレスさん、なにか変です！」

ついにクロエは剣すら取り落とし、自らの乳房を揉みながらアレスに迫り始めた。

マルティナやノーラも股間をまさぐりながらふらふらよろよろと近づいてきて、下手に剣を振るうと傷つけてしまう恐れがある。

「くそつ、これもヤツの仕業なのか。

卑怯な……」

「哀れな人間よ。我を倒したいならその女どもを斬り殺すしかないぞ。どちらにせよ、そろそろせいづらもおしまいだがな！」

「なんだと?」

ヘルメスの魔力に正気を失っていたクロエたちの様子がおかしい。先ほどまでのようにアレスの邪魔をするのではなく、地面にへたり込み、あへあへとよがり声を上げ始めたのだ。

「ふひいんつ、おまんこいいつ、イツチャウらうつ！」

「んちゆつ、ちゆば、もつと身体中弄つてえ、気持ちよくさせてえ〜つ！」

触手の先端に舌を絡めるノーラは、さながら白い蛇のように女体をくねらせ、触手の動きに悶えている。

「クククク、魔族の触手から染みでた魔催淫液は、女どもの肌から沁み込んで神経を侵す。そいつらが快楽の中で廃人になるのを見ながら、貴様は我に倒され死ぬのだ！」

「マルティナさま、しつかり！」

悶えよがるマルティナにセリアが駆け寄り、触手をほどこうとする。だが触手はセリアの手にも絡みついてくる。それでも少女は懸命に触手を引きちぎり、マルティナを救おうとする。

（こうなつたら一刻も早くヘルメスを倒しリーネを救う。クロエたちが無力化したいまこそ好機だ!）

クロエやノーラたちが完全に精神を

失った。

侵される前に、リーネを救いヘルメスを倒す。もはや勝機はそこにしかないと思われた。

「ア、アレス……あたしのこととは構わず、この化け物を討つて……！」

「リーネ！」

深々と魔物の陰茎を撃ち込まれているというのに、リーネは正気の手綱を放してはいない。

「シンシアは……シンシアもこいつにひどい目に遭わされていたけれど、あたしが隙を見て逃がしたわ。今ごろはきつと、ベアトリスと……ああっ」

自ら虜囚となつてなお、金髪剣の女王はシンシアの無事をアレスに伝えようとする。

しかしその健気さをあざ笑うように、ヘルメスはむずとリーネの白い肉球を掴み上げ、無遠慮にぐいぐいと揉みしだく。

「ずいぶん強がるじゃないか、小娘だがいくら気を張つても、肉体の反応までは抑えられぬようだ」

そう言つて、尖つた爪先に乳首を挟んでこりこりと刺激する。リーネは痛みと、それ以外の感覚に美しい顔を歪める。

「うっ、ひうっ……だ、誰が……お前みたいな汚らわしい化け物に屈するものか……っ」

その気高さに勇気づけられ、数度斬りかかるものの、ヘルメスは巧みにリーネの肢体を盾にして、アレスを威嚇する。いかに聖武具を身につけていて

も、攻めきれない。

「どうしたどうした、貴様の覚悟はその程度か！ この女の胎内にも我が魔淫液はじわじわ沁み込んでいくぞ」

「ああ……くああああっ！」

ずぼっ、ずぼぼっ、ずくんっ。

ヘルメスが動くたび、股間のイチモツは容赦なくリーネの膣穴を突き上げ、少女の腹部が重たげに歪む。

そこに宿るのはバロツクの血を引く赤子。ヘルメスはリーネだけでなく、そのお腹の子どもまで人質に取つていれるも同然なのだ。結合部から噴きこぼれるのは魔物の体液か、あるいは少女の愛液か。

激しい突き込みに思わず身をよじつても、魔物の長大な陰茎はリーネの肉穴を貫きかき回すばかりで、逃れようがない。

「んひっ、ひい、ああ……っ、は、早くあたしごと、こいつを……んあああんっ」

「いくら強がついていても、子宮が開いているのがわかるぞ、小娘。それとも産気づいたのかな？」

嘲弄するような悪魔の言葉に、リーネの頬が染まる。

確かにリーネもいつ出産してもおかしくない身重の身体。しかもクロエたちはますます激しく身悶え、正気を失いかけています。

いずれはリーネ自身も魔物の体液の効果で平静を保てなくなるだろう。早くリーネをヤツから引き剥がさな

ければ！

しかし、その焦りがアレスに一瞬の隙を作る。

その隙をいち早く捉らえた飛行型の魔物が、上空からアレスに襲いかかってきた。

「しまつ……」

「ぐげえええっ!!」

だが、魔物は放たれた長剣に串刺しにされ、血反吐を吐いて墜落する。

ハッと振り返つたその先に兵士たち、そして—— 剣を構え直したアレスの耳に、懐かしい声が響く。

「アレスどの！ その姿は聖武具か」「アレス、戻つてくると信じておつたぞ!!」

「ラ、ランドルフどの……それにウオードどの！」

それは各国騎士団とハイランド軍を率い、市内の魔物の半分がたを駆逐したランドルフとウオードであった。

彼らは「アレス將軍帰還せり」との一報を受け、やはり若き智将の行いに偽りなしと判断し、加勢に駆け付けたのだ。

だが、その背後から巨大な氷の弾丸が迫り、地面をえぐる。

「あはははは、逃がさないつては！」  
明らかに正気でない表情で高らかに笑うのは、ヘスティアの三魔女の一人、ドロシー。

彼女はなんのためらいもなく、味方であるウオードたちに攻撃魔法を放ち、それにウエンディとサブリーナまでが続

く。

「ひあはははは、けひひひひひひひ！」  
「みんな、殺しちゃうよ、殺すよ、いいよね？ くすくすくすくす」

「むう、皆目を覚ませ、正気を取り戻すのだ！」

ランドルフたちが兵士たちを引き連れてきたのはありがたいが、彼らを追つてヘスティアの三魔女やマリオンまでもが参戦し、魔法を放つてくる。

ハイランド王城は魔皇子ヘルメスと洗脳された乙女たちの入り乱れた乱戦模様となつてくる。

「ふっははは、踊れ踊れ人間ども！ 貴様らの末路には滅びしかない。その断末魔で我を楽しませよ！」

魔皇子は両腕と黒い翼を広げ、ゲラゲラと人々を嘲り笑う。人の死と破壊に興奮する悪魔の腰がぶるぶると震え、リーネは白い喉をのけぞらせて悶えよがる。

「あああああつ！ あ、熱いつつ」

びゆるっ、びゆるるっ、びゅばああああ……っ。力強く脈動した魔陰茎から白濁液が迸り、乙女の子宮を満たしていく。その熱と量に気丈なリーネといえどたまらず絶叫する。

「ひいひいひいっ！ いやあ、やめて、もう中に出さないでええっ」  
ツインテールを振り乱すリーネの股間から、あとからあとから白い液体がこぼれ落ちる。

リーネの尻に浮かぶ涙、嘔みしめた唇に滲む血は単なる苦痛、恥辱による

るものではない。

びくびくと内腿が痙攣しているのは、繰り返し襲ってくる快感によるもの。ぎりりと唇を噛んでいるのは、こみ上げる愉悅を堪えているが故。

「やあ……見ないでアレス。あたし、こんな悪魔に中出しされて、赤ちゃんいるのに、気持ちよくなってる……」

「リーネツ」

これまでもリーネは幾度も暴漢に襲われ、辱めを受けてきた。

パロックを受け入れ、その子種を授かることに悦びを感じていたこともある。だが、人類の敵、すべての元凶であり悪意の塊であるヘルメスの子種を注がれてよがるなど、あつてはならぬ屈辱の極み。

「抵抗しようが無駄なこと。魔族の精液の前に人間の脆弱な神経はいやでも感じずにはいられない」

明らかにアクメの痙攣を繰り返すリーネの肢体を、ヘルメスが軽々と持ち上げる。巨大な男根がずぼりと引き抜かれ、リーネは「はうっ」と悲鳴を上げる。

「ひっ、こ、こぼれちゃう……」

宙吊りにされた乙女は壊れた人形のように手足を震わせ、股間から滝のようにザーメンを滴らせる。

「うっ、生ま、生まれるううっ」

あまりの大量射精に刺激されたためか、見る間に少女の花弁が開いていく。ヘルメスは哀れな女体をどざりと地面に放り出すと、鍵爪の付いた足底で

リーネの頭部を踏みつけにした。

「ぎゃ……ぐ、ううう」

「その目でしかと見よ人間、この無様なメスの姿を！こ奴はいまから至福の愉悅に包まれながら、赤子をひり出すのだ、魔族の体液に包まれた呪われた子を！」

ヘルメスはその気なら、リーネはただの一瞬で頭を踏みつぶされ絶命していただろう。

だが魔皇子にはリーネを殺す気はなかった。ただただ、アレスたちの目の前で乙女の尊厳を粉々にして、人間を絶望させるのが目的なのだ。

「いやあ……こんなの、こんなのいやああ……っ」

口では嫌と言いつつ、リーネの四肢は出産そのものを快感として受け取り、大きく腰を浮かせて股を開ける。

ぱっくりと開いたヴァギナから新たな白濁がこぼれ、やがてそこから赤子の頭部が姿を現していく。

「いひいひいひい、イクううう、赤ちゃん産みながらイグ、イチチャうううううう！」

産気づいた乙女の産道はますます広がりが、自然の摂理に従って子宮の赤子を体外に導いていく。

びく、びくとリーネの腰が痙攣するたび、新生児の頭部が、身体が押し出され、やがて「ずるり」と地面に胎児が産み落とされた。

「あ、あたしの、あかちゃ……」  
はあはあと息を荒げるリーネ、だが

産み落とされたばかりの胎児はへその緒でリーネと繋がったまま。

魔物の粘液にまみれ、産声一つ上げようとしない。リーネの顔が悲しみに歪む。

「ひ、ひどい……もうやめて……そんなひどいことやめて！」

同じ女として見るに堪えないのか、セリアが思わず目をそらす。その傍らから、大剣を構えて飛び出した巨漢が一人。

「リーネさま、いまお助けします！」  
主君の惨めな姿に飛び出したのは、ストームランス公国の騎士団長ランドルフ。しかし魔皇子はリーネの頭を踏みつけたまま、振りあげた爪をランドルフめがけ振り下ろす。

ランドルフにヘルメスの爪を避ける気はなかった。騎士の忠誠を誓った美しき主君を助ける、そのためなら自分の命を投げ出すにんのためらいがあるろうか。

「させんつつつつつ」  
ぎいぎいぎいんつ。ヘルメスの爪がランドルフを引き裂く寸前、聖剣が悪魔の爪をはじき返す。しかしそのアレスめがけ、ヘスティアの三魔女が風・炎・氷の属性攻撃魔法を立て続けに放ってきた。

ぐわあんつ、どおん、ばきばきばきいっ。炎が走り地面が裂け、氷塊が襲いかかるのを聖盾で防ぐ。

「こいつを喰らえ、ひひひひっ！」  
マリオンの手から放たれた小型ボウ

ガンを弾くものの、アレスは完全に体勢を崩していた。

「これで終わりだ、人間!!」

「ごおっ。凄まじい突風を引いて、悪魔の爪がアレスを襲う。アレスは聖剣を構え、それを受け止め――。」

「アレスさんつつつ」  
ぎいんつ……鈍い音とともに、聖剣の先端が折れて宙を舞った。ヘルメスの爪はそのままの勢いで聖鎧に食い込み、アレスの肩口を切り裂いた。

しばっと真つ赤な花が咲き乱れたように鮮血が吹き出す。

ヘルメスの一撃はアレスの鎖骨を砕き、肋骨を数本叩き折っていた。ぐぐ……と力を込めると、アレスの顔が激痛に歪む。

「ぐ……おおっ！」  
左手に持った聖盾で爪の侵攻を防ぎ、そのまま弾き飛ばす。

ぶしゃあつと出血がひどくなり、アレスは数歩後退して距離を取ったが、溢れ出る流血でみるみる右半身が赤く染まる。

「アレスさんツ、いやあああつ！」  
セリアの悲痛な叫びをかき消すように、ヘルメスは哄笑した。がふつと咳き込むとともにアレスは吐血し、傷が肺にまで達しているのは明白。

「ま、まだ……まだ俺は生きていますヘルメス！」

だが、アレスはもう立っているだけでやつと、兵士たちもウオードらも三魔女たちの攻撃をしのぐだけで手いっ



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**